

記 録 誌

全日本仏教会 公開シンポジウム

# 仏教とSDGs

現代社会における仏教の平等性とは ～女性の視点から考える～

2020年8月25日(火)開催



# 仏教 SDGs

## C O N T E N T S

ご挨拶 ..... 2

### 提言①

仏教と女性解放 田中優子氏 ..... 4

### 提言②

「女性活躍」を考える 村木厚子氏 ..... 8

### 提言③

皆仏になる 岡田真水氏 ..... 16

トークセッション ..... 22

### 所感

「SDGsとジェンダー平等」へのコメント  
川橋範子氏 ..... 38

### 所感

第1回「仏教とSDGs」についてのコメント  
岩田真美氏 ..... 40

### 所感

第1回「仏教とSDGs」についてのコメント  
松崎香織氏 ..... 42

## ご挨拶

全日本仏教会第34期事務総長を務めております木全です。公開シンポジウムの開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

本会は2018年に開催したWFB世界仏教徒会議日本大会において東京宣言を採択し、SDGsの具現化を進めております。SDGsが掲げる17の目標のうち、「ジェンダー平等の実現」への取り組みとして、本日のシンポジウムを企画いたしました。

仏教界は伝統的に男性社会であるといえます。しかし、近年は女性が寺院と関わる場は増えており、多様性を尊重する社会において様々な方の意見に耳を傾けることが、今一度、仏教の価値を見出すことにも繋がります。男女問わず全ての個人が平等に社会の中で能力や個性を十分に発揮し活動するために、仏教界がどう変わっていくべきなのか、何ができるのか共に学びを深めていければと存じます。

本日のシンポジウムが、日本宗教連盟の方々や社会の皆様にもご参加をいただき開催できますことは、誠に意義深いものと考えます。

ご視聴いただく皆様方にも、現代社会における平等性とは何なのか、ひいてはSDGsについて一層の学びを深めていただける機会となれば幸いです。

最後になりましたが、本日のシンポジウム開催にあたり、ご尽力を賜ります講師の皆様、ご後援をいただきました公益財団法人日本宗教連盟様、関係諸団体の皆様のご協力に心より深く御礼申し上げますと共に、ご参加いただきました皆様方のご健勝を祈念申し上げまして、ご挨拶いたします。

公益財団法人 全日本仏教会  
第34期 事務総長 木全和博

公益財団法人 全日本仏教会 WEB公開シンポジウム

# 仏教 SDGs

現代社会における  
仏教の平等性とは

— 女性の視点から考える —





## 提言①

# 仏教と女性解放

田中優子氏

よろしくおねがいいたします。私からは「仏教と女性解放」これは案外強い関係がある、というお話をさせていただきます。

まず日本での仏教が、どういうあり方をしていたのかをお話いたします。平安時代や中世ですが、源氏物語やそのほかの物語類をみるとわかりますように、貴族階級の方達にとっても、お寺は避難所みたいなところでした。本当に何か困ったことや、あるいは身を隠さなければならないような事情があった時には、みなさんお寺にいらっしゃるし、それから尼になるという道もありました。ですから社会の中で受け容れてくれるところでした。「アジール」といいますが、ある種の駆け込み寺的な機能というものは随分昔からあります。女性蔑視は実際には組織的にありますが、よく考えてみますと「山川草木悉有仏性」といいますように、全てに仏性があるというのは仏教の基本的な教えですので、平等であって当たり前です。しかしこの避難所というのは社会から隠されているところですから、政治権力にとっては、それを排除しようとする動きはどうしても出てきます。仏教の弾圧も政治権力からは随分あったわけです。しかし鎌倉時代あたりでは、仏教を布教しようということで、どんどん布教者たちが集落に入って、村落で「講」というものをつくりました。「講」という名前はその後にもずっと残りますが、元々は仏教の布教のためにつくられたものです。そして江戸時代に入ると、ご存じのように檀家制度になり、お寺を中心にして人々の管理をすることになるわけです。檀家制度になったのですが、それでも駆け込み寺というものは残ります。それからもう一つ「講」も最初は布教のためにできたのですが、さらに広がって布教の役割から、集会であったり、参詣であったり、そういうことをする役割に変わっていきました。今でも念仏講のような形で集落に残っている例があります。それから近代になると、檀家制度が廃止されました。天皇家も仏教の信仰をしていましたが、檀家制度がなくなって廃仏毀釈が明治になってはじまると、天皇家も信仰対象から仏教を外すということになってしまいました。近代の仏教は日本の歴史上、最も国家により弱体化されたということです。これもまた、仏教が持っている平等思想が危険視されたのではないかと私は思っています。そういうことから、仏教界は常に政治権力に対抗できる力を持ち続けてきたということですね。それだけ強いものだと。それは是非自覚していただきたいなと思います。

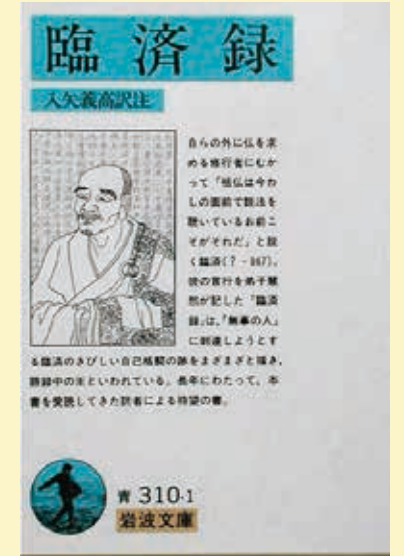
近代になってから、仏教は女性解放運動のきっかけになりました。仏教というものは、平等の本質を持っているということに気づいた個人によって、思想と精神の拠り所になりました。非常にはっきりとした例として1911年9月に『青鞥』の創刊号で平塚らいてうが「元始、女性は太陽であった。」という一文を寄せます。当時の女性に非常に大きな影響を与えまして、実は私の祖母もこの文章を見て東京に出てきてしまったとい

う影響された中の一人です。

その一文の中にこういうくだりがあります。「釈迦は雪山に入って端座六年一夜大悟した」と。そこで、らいてうは、「奇なる哉、一切衆生、如来の知恵徳相を具有す。又曰く、一仏成道して法界を観見するに、草木国土悉皆成仏す」という文章をこの中に書き付けています。つまり「悉皆成仏す」と。すべての人に仏性があるという、この平等の基本を仏教から学んだという書き方をしています。平塚らいてうはどのようにして仏教に近づいていったかですが、友達から今北洪川さんの『禅海一瀾』という本を借りて読みます。そして、現在は「人間禅・澤木道場」というところになっていますが、当時、釈宗活さんがいらっしゃった「両忘庵」で、女性も坐禅ができるようになっていたので、そこで坐禅をするようになります。この『禅海一瀾』はどのような本なのかというと、儒教の言葉で儒者が仏教を語っている書物です。ですから仏教のことをよく知らなくても江戸末期から明治初期の、ある程度の教養がある人であれば大変わかりやすい本でした。この中に「大道は心に求む。外に求むことなかれ。我が身体の妙用は、直ちに我が大道なり。儒仏の差別を差し挟むことなかれ」という文章があって、儒教も仏教も同じなのだ、一番大切なのは心の中なので、自分の心の中にそれを求めなさい。ということを行っています。「夫れ道は一のみ。神儒仏老唯これこの道」と。つまり同じ道ということを行っています。平塚らいてうは、これを読んだ時にまだ二十歳前後で、そのとき非常に悩んで迷っていましたが、どこに拠り所を見つけるということではなく、自分の中に拠り所を見つけることが一番大切なことだということに気が付きます。そしてまた『禅海一瀾』の中に、「まづ静坐に依って、工夫を凝らし、以って外物を空ずべし。」とあります。やっぱり坐禅しなさいと言っているのです、実際に坐禅をするようになったのです。こういう経過がありました。そして平塚らいてうは、その後『臨濟録』も読むようになります。『臨濟録』の中には、「赤肉団上に一無位の真人有って、常に汝等諸人の面門より出入す」とあります。「真人」という言葉をここで使っています。肉体の中には本当の人間というものがあると、それが出入りしているということが書かれていて、それをらいてうは、「わかった」と思うんですね。非常に納得するんです。この「無位の真人」とか「万法一如なり」「随所に主となれば立処皆な真なり」これらがらいてうの思想の基本になります。

平塚らいてうは、坐禅をしている間に「本来の面目父母未生以前における本来の面目いかん」という公案も与えられるところまでいきました。そして実際にこういうことを解って文章を書いており、「元始、女性は太陽であった。」という文章の中に、どのように出てくるのか。「元始、女性は実に太陽であつた。真正の人であつた。今、女性は月である。他に依つて生き、他の光によつて輝く、病人のやうな蒼白い顔の月である。」と書いています。「真正の人」と「仮現の我」と「不死不滅の真我」ということ、これらを対照的に置いています。仮の自分と本当の自分というものがあるのだと。仮の自分に目を向けてしまうと何が起るかというと、男性とか女性とか、性別が見えるとか。これは仮の自分なのだとことを言っているのですね。

真の自由解放というのは、「潜める天才」これは才能という意味です。偉大なる潜在能力を十二分に発揮



『臨濟録』（岩波文庫）

## 現代社会における仏教の平等性とは

させることだと。男性とか女性とかいうことではないのだと言っています。このようなことに、らいてうは自分自身気が付いていきます。そして、女性の自由解放について、「いわゆる高等教育を授け、広く一般の職業に就かせ、参政権をも与え、家庭という小天地から、親といい、夫という保護者の手から離れていわゆる独立の生活をさせたからとてそれが何で私ども女性の自由解放であろう。我々女性の智識の水平線が男性のそれと同一になったとしたところでそれが何であろう。私はむやみに男性をうらやみ、男性に真似て、彼らの歩んだ同じ道を少しく遅れて歩もうとする女性を見るに忍びない。」ということを行っています。女性の自由解放というのは男性になることじゃない。仕事に就くことで解放されるなんて思うな。ということです。これは、仕事に就くことを否定しているのではなくて、それだけで解放されるわけではないということを行っています。なぜこういうことをわざわざ言っているのかと言いますと、明治時代の男性達を彼女は見ているわけです。新しい世界の明治・大正の日本の中で、社会的地位とか権威を価値とする立身出世主義。ある意味では平等になったから誰でも出世できる時代になりました、お金さえ持っていればという金儲け主義も出てきます、エリート主義も出てきます。そういうところに男性が入り込んでいくところを見ているわけです。そういう世界、そういう人間になっていいのだろうか女性達は身近な男性達を見て思うわけです。例えば平塚らいてうのお父さんは藩士の出身でしたが、本当に典



「平塚らいてう氏」  
国立国会図書館ウェブサイトより

型的な一人で、国家がヨーロッパを規範にしていると、家庭の中でもそれを実現しようとして、妻に洋服を着せたり英語を習わせたり、娘たちに洋服を着せたりしました。ところが今度、国家が日清戦争に向かい、日本が一番という国粋体制の状況になってくると、今度は日本風を妻と娘たちに強要するようになります。そして結局は天皇と国家が自分の規範になります。これを女性から見ていると、男性というのは結局自分ではなくて周りの社会に従って自分の考え方をころころ変えるのだというように見えてきます。そういう社会の中で自分たち女性は、どうやって生きていくべきなのかということを考えるようになります。そしてらいてうは、こういうことを呼びかけるようになります。「隠れたる我が太陽を、潜める天才を発現せよ。」「私ども女性もまた一人残らず潜める天才だ。天才の可能性だ。可能性はやがて実際の事実と変ずるに相違ない。」「女性よ、芥の山を心に築かんよりも空虚に充実することによって自然のいかに全きかを知れ。」「我れ我を遊離する時、潜める天才は発現する。」「その日、私どもは唯我独尊の王者として我が踵もて自然の心核に自存自立する反省の要なき真正の人となるのである。そして孤独、寂寥のいかに楽しく、豊かなるかを知るであろう。」他に依存して生きるのではなくて、自分自身の基準で自然の中に屹立していくということで、女性達は本当の才能を発揮できる。そういう心を持ってくれということを最後に呼びかけます。そういうことを考えますと、明治の初期、廃仏毀釈の後ではありますが、仏教を拠り所にして自立ということは何か、ということのかなり真実のところには日本の女性解放運動は迫りました。私は素晴らしいと思っています。単な

る政治運動ではなかった。まさに人間の解放運動であった。そういうことを私たちはちゃんと受け止めているだろうかと思っています。

女性解放運動と仏教とのかかわりは、非常にすごいものがあったということをもっとお話ししたいと思いました。どうもありがとうございました。



## 田中優子

法政大学 総長

1952年生まれ 神奈川県出身  
1974年3月 法政大学文学部卒業  
1977年3月 法政大学大学院人文科学研究科修士課程修了  
1980年3月 法政大学大学院人文科学研究科博士課程単位 取得満期退学  
【専攻】江戸時代の文学・生活文化、アジア比較文化  
1980年4月 法政大学第一教養部専任講師  
1983年4月 法政大学第一教養部助教授  
1991年4月 法政大学第一教養部教授  
2003年4月 法政大学社会学部教授  
2012年4月 法政大学社会学部部長(2014年3月まで)  
2012年4月 学校法人法政大学評議員(2014年3月まで)  
2014年4月 法政大学総長、学校法人法政大学評議員(現在に至る)

行政改革審議会委員、国土交通省審議会委員、日韓交流出版選定委員、  
外務省ベトナム交流委員、放送文化基金審査委員、町田市文化財保護委員、  
文部科学省学術審議会委員、朝日新聞書評委員、芸術選奨(文化庁)委員、  
放送文化基金評議員等を歴任

・(一社)日本私立大学連盟常務理事 ・(公財)大学基準協会常務理事  
・日本学術会議外部評価有識者 ・(公財)サントリー芸術財団理事  
・大学設置・学校法人審議会 特別委員  
・(公財)東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会  
「東京2020有識者懇談会」委員 その他多数



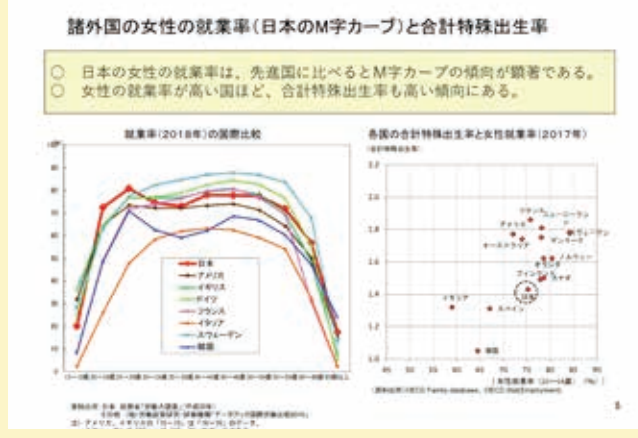
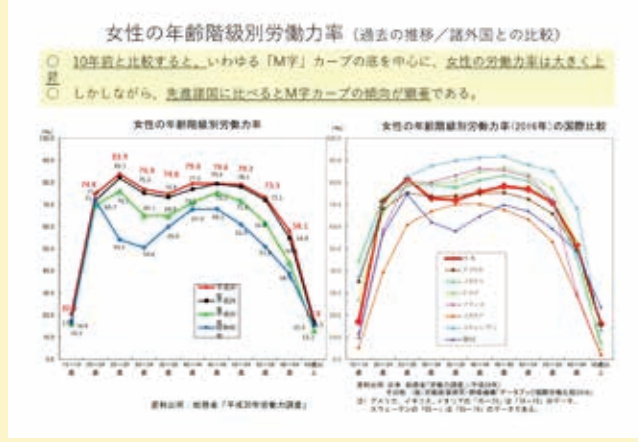
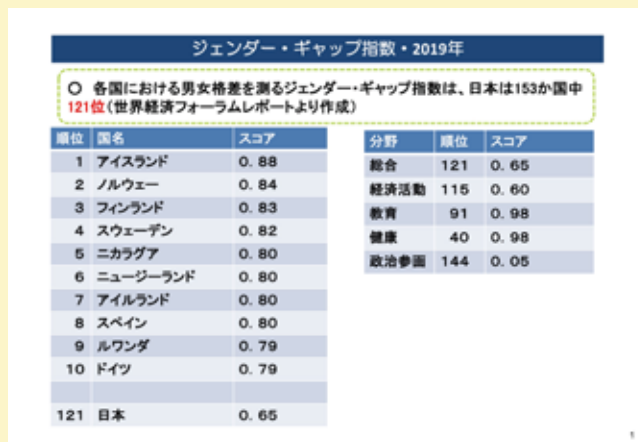
### 提言②

## 「女性活躍」を考える

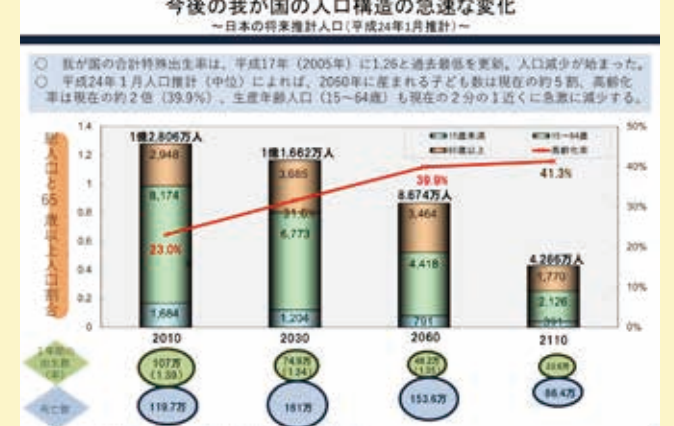
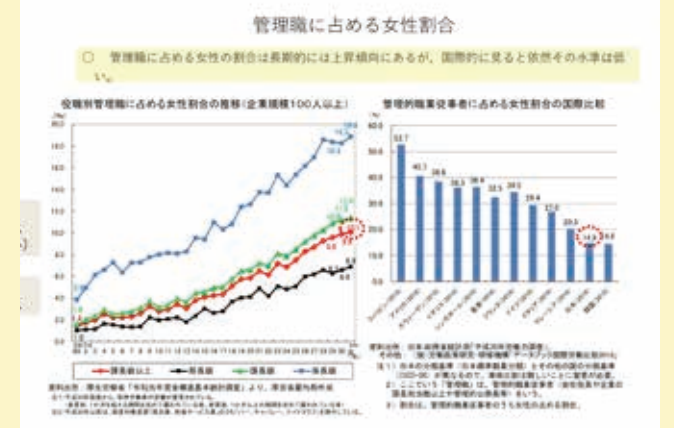
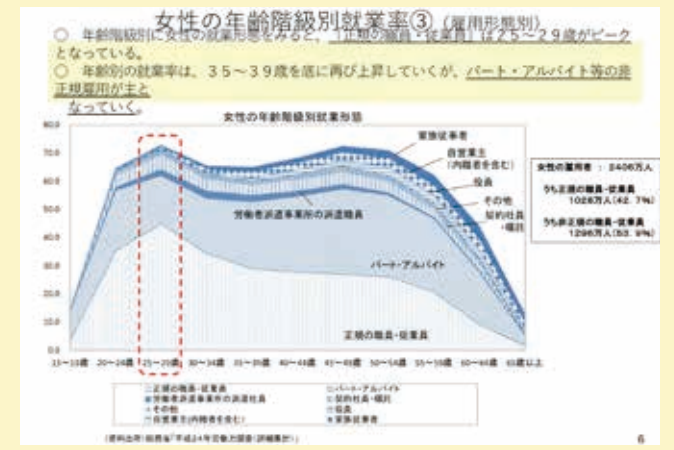
村木厚子氏

皆さんこんにちは。私からは、田中先生とは違う角度で非常に世俗的なことをお話ししたいと思います。私自身は労働省、その後厚生労働省で、一般にはビジネスの世界でお給料をもらって働く世界の女性が、どうやったら活躍ができるかをずっと仕事としてやっていたので、そのあたりのお話をしたいと思います。

SDGsの話が出ますと日本で一番遅れているのは、やはりジェンダー平等の問題だと思います。日本の女性の活躍はどうかという時に、よく引き合いに出されるダボス会議で発表されるジェンダーギャップ指数です。最新のデータでは、153か国中121位というのが日本の位置です。このランクが低いのはもちろんですが、私自身がこの数字を見ていつもショックを受けるのは、日本の順位がじわじわと下がっているということです。もうずいぶん前ですが、日本は女性活躍がこんなに進んできているのに、なぜ順位が下がるんだと非常に不思議に思いまして、事務局に問い合わせしてみました。その時に事務局から返ってきた答えは忘れもしません。「日本は良くなっています。でもほかの国はもっと速いスピードで良くなっています。」これが答えでした。女性の活躍は本当に大事だと皆わかっているのですが、この国はなかなか改革が速いスピードで進まないということがわかります。



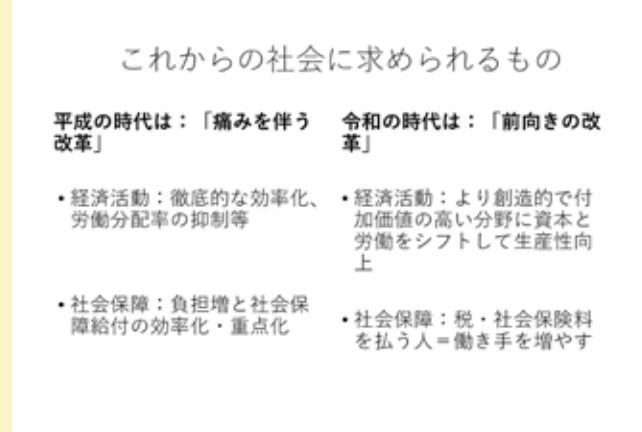
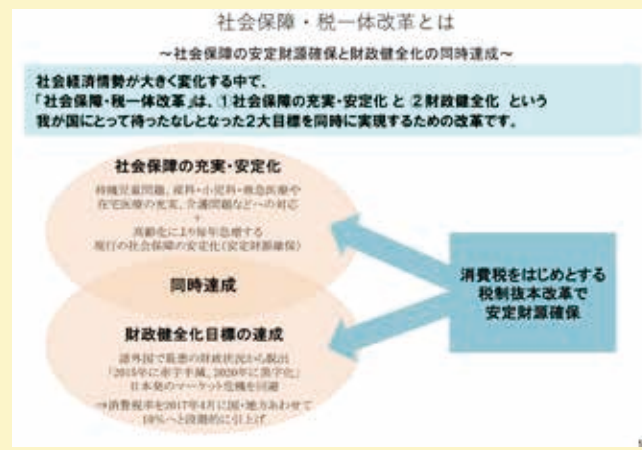
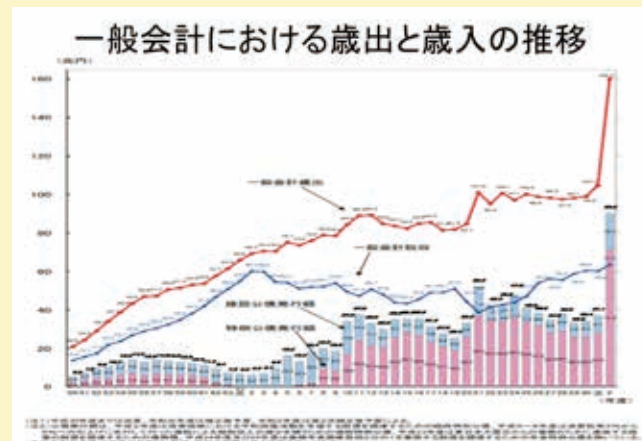
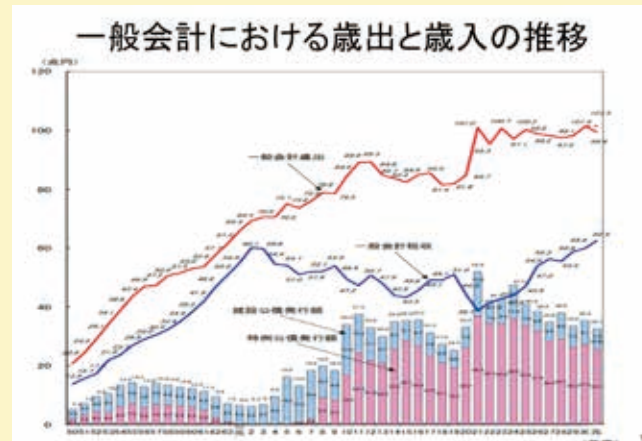
特に女性の活躍のネックになるのは、家庭責任だと言われています。これは年齢別に見た、女性がどれだけ職場に参加しているかというデータですが、子育ての時期に職場からリタイアをする女性が多いたることをデータも示しています。では、日本の女性が子育てにとっても力を入れていて家庭を大事にできている、子供もたくさん生まれているのか、というと日本は本当に少子化が進んでいるということになります。実は意外にも、出生率の高い国の方が女性活躍が進んでいるというデータがあります。そういう意味では、女性はなかなか家庭も大事にできず、仕事でも活躍ができていない、これが日本の現状だと思っています。最近、働く女性は増えましたが、とりわけ正社員が少ない。パートやアルバイト、派遣、こういったかたちで働いている人が多いということもあります。その結果、決定的にでてくるのが管理職などの意思決定をする場所に女性がいないということです。こんな状況が121位という数字に表されているのですが、実は最近日本の政府は、結構本気で女性活躍を提唱して推進しています。それはなぜかという、今の政府が特別に女性の問題に理解があるということとはかなり違って、もっと現実的な理由です。少子高齢化などもあって、日本ではこれからどんどん働き手が減っていき、高齢者は増えていく。支えられる人が増えて、支える側が減るという大変厳しい社会が待っている。とりわけつらいのが社会保障です。年金の原資がいます。医療や介護をまかなっていくことで、財政負担が非常に増える。そういう状況を反映して日本政府の財政は、実は多くの赤字となっています。



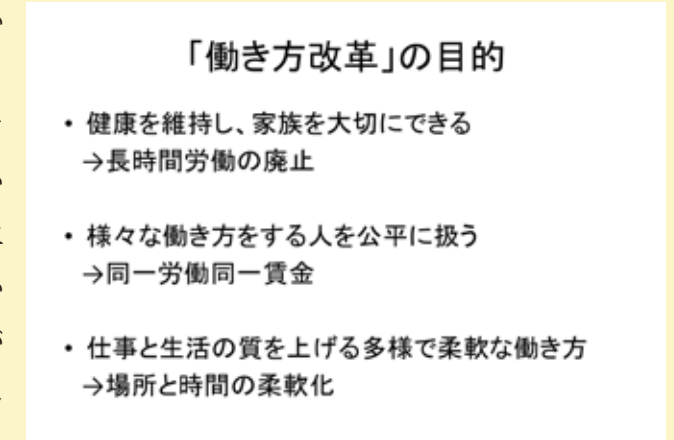
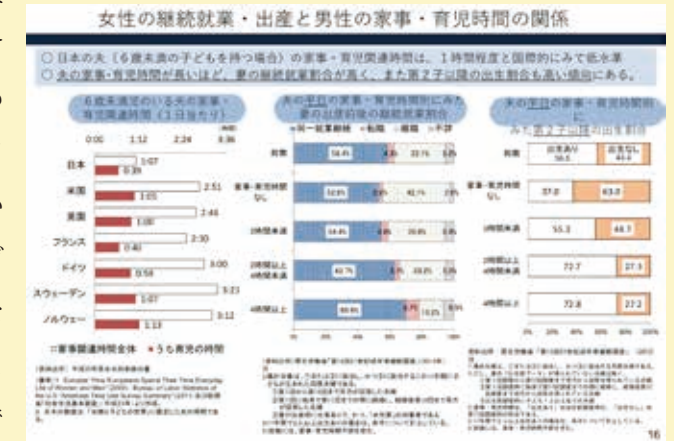
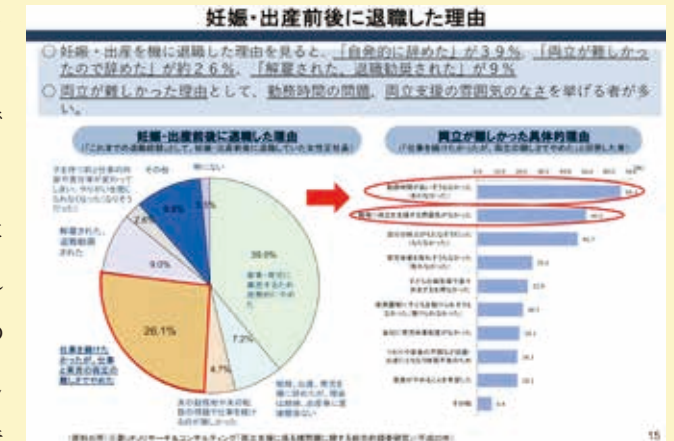


現代社会における仏教の平等性とは

折れ線グラフが2つありますが、赤い上のほうが支出で、青い下のほうが税収で、支出がはるかに税収を上回っているという赤字会計です。これは、去年まで使っていたデータですが、今年（2023年）のデータが入ったものを見てもらうと皆さんゾッとされると思います。コロナの支出で、さらにこの赤字がひろがっていくということです。この赤字のツケは誰が払うかというと、我々の子供や今の若い人達です。このまま放ってはおけないということで、政府は7、8年ほど前に消費税増税を決断しました。そして社会保障も一定程度抑制しようということになりました。そのときに「社会保障と税の一体改革」と呼ばれた大きな改革が始まって、消費税が5%から8%、10%というところまでいきました。2度の政権交代をはさんでやってきたこの改革は非常に大事なことだったと思います。ただ、これだけではまだこの赤字を埋めきれないという現実があります。税金を上げる、社会保障をうける、これだけ不人気な政策というのは、政治家であればだれだって本当はやりたくない、多分ものすごく嫌な改革です。では、このまま同じようなことを続けるのか、もうちょっと痛みをともなわない方法での改革はないのかという議論が近年ずっとされてきました。その中で、支え手が増えればいいんだ、女のひとに頑張ってもらえばいいんだ、女のひとに働いてもらおう、高齢者にも働いてもらおう、ということを考え、政府は女性活躍を本気で言うようになりました。それまでは、厚生労働省や内閣府しか叫んでいなかった女性活躍を経済産業省とか官邸が言うようになりました。



これは非常におもしろい変化だだと思います。しかし、事はそう簡単ではない。121位をどうやったら変えられるかということが、ここ数年必死で検討されました。女性活躍。育児休業をやったかどうか。女性の働きやすい短時間勤務を増やしたらどうか。いろんなことをやってきましたがそれだけでは進まない。女性の側から見て、なにがつかのつかを聞いたところ、特に男性をはじめとした職場の人は長時間労働であり、その中で家庭責任があるからさっさと帰る女性が歓迎されるわけがなく、とても居づらい世界だということが言われるようになりました。他の国で子供も多く生まれている、女性も活躍しているという例をみると、大変おもしろいことがわかってきます。グラフの一番左は、いろんな国の小さなお子さまをもった家庭での、お父さんの家事育児時間です。日本よりはるかに長い。真ん中は日本のグラフです。下にいくほど、夫の家事育児時間が長いということです。伸びている青いデータが何かというと、女性が働き続ける割合です。一番右のグラフも、下にいくほど男性が家事育児に参加をしているということです。伸びている白いデータは、二人目以降の子供が生まれた割合です。女性活躍から見てみると、先ほどの田中先生のお話につながるものがありますが、女の人が男の人の真似をしてもみんなが幸せになれるわけではない。みんなが求めるもの、みんなの暮らし方、みんなの働き方が変わらないとだめです。こういうことがわかってきて、やっといま働き方改革というところに来た。これが今の日本の現状だと思います。

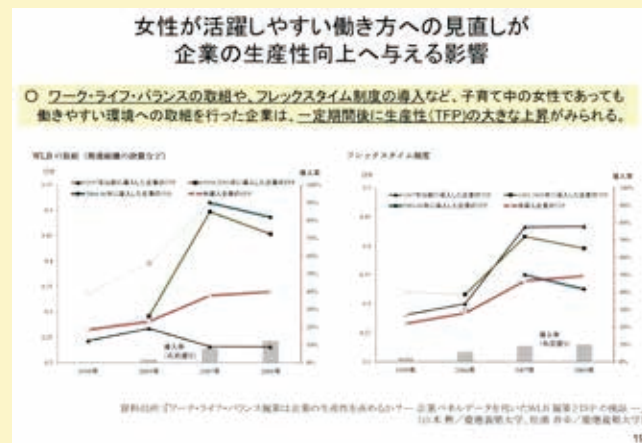




現代社会における仏教の平等性とは

こうして政府は、日本が将来を維持できる国にするには女性活躍は避けて通れない、喫緊の課題だという結論は出したわけですが、一つひとつの企業にとって女性活躍とはなんでしょう。政府はそう言うけど負担だよ、重荷だよ、というのがこれまでの企業や組織の本音でした。しかし、そこもだんだん変わり始めました。女性に優しい企業をつくりたいと思うと負担だというのは、皆さんは直感として感じておられますが、本当にそうか、ということが色々データでわかってきました。このグラフはとてもおもしろいグラフです。家庭と仕事が両立しやすい企業をつくる。あるいはフレックスタイムで、もうちょっと自由に働ける。最近在宅勤務かもしれない。そういう仕組みを取り入れた企業の生産性は上がるのか下がるのか、というのを調べました。結果どうなったかという、ちょっと時間がかかる、一定の時間がかかるけれども、そのあとグッと生産性は上がるというのが調査研究の結果でした。なぜ、そういう企業の生産性が上がるのか。まだ、きちんとした論文が書かれているわけではないのですが、いくつか理由が言われています。まず、一番単純には、もしあなたがなにかしらのスポーツの全日本の監督になったら、西日本からだけ選手を集めますか。そんなことしたら全日本の監督失格ですよ。やっぱり全国から集めてきます。女性は人口

の半分です。この組織にとって大事な人、役に立つ人、組織の目的をちゃんと達成できる、そういういい人材を集めようと思ったら、当然半分の人口である女性からも、人材を集めて育てた組織のほうが勝つでしょう。これは非常にわかりやすい。でも、ちょっと時間がかかるというのはなんだろう。ニューカマーが入ってくるわけです。いろんな新しい制度を入れるとやっぱり混乱もあるだろう。混乱を我慢して乗り越えられるかどうか勝負であるようだと言われています。私はこの話を聞いたときに、日本のラグビーを思い出します。最近、日本のラグビーは大変強いですが、昔の日本のラグビーは大変弱かった。海外の選手を全日本の代表に入れた頃から日本のラグビーは強くなりました。実は私はあの頃、強くなるのはうれしいけど、こんなに外国の選手を借りてこないで日本のラグビーが強くなれないのは、なんだかちょっと残念だなと思いました。



### ダイバーシティの持つ強さ①

- ・「新しい人」を迎える
- ・「ムラの空気のがバナンス」(阿吽の呼吸で分かり合えるメンバーだけで構成する)の罫にはまるリスクの低減

→グローバル競争の中で中長期的に企業価値を高める可能性を大きくする

富山和彦 「なぜローカル経済から日本は甦るのか」

### ダイバーシティの持つ強さ②

- ・多様性というものの重要性を教えてくれるのは、生物の世界である。…個々の生物はそれ自体では弱くとも、その多様性ゆえに、自然環境に適応できる強さ、しぶとさをもちえているのである。…多様性を維持することで、われわれ人類もこの地球上で将来も生存し続けることが可能であろうという漠然とした期待を抱かせてくれる。少なくとも多様性以上に期待をもたせてくれるものは現状では見当たらない。

しかしエディー・ジョーンズのインタビューを聞いてから、全く考え方が変わりました。「たくさん外国から選手を連れてきただけでは日本のラグビーは強くなれない。その連れてきた選手と日本の選手と一緒に時間をかけて、彼らにジャパンウェイ、日本のラグビーを身に付けてもらった時に初めて強くなる」それを聞いて、ニューカマーがやってきて、自分たちがめざそうと思うものを一緒にめざせる組織というのが大事な

- ・日本人は世界的にもまれなホモジニアス(均質)な民族と言われる…明治以降の日本の発展は「世界の奇跡」と言ってもよく、これを可能にした大きな要因の一つが日本社会特有の均質性である。…しかし、いまではその均質性がむしろマイナスになりつつある。
- ・均質社会の中では異質なものを排除してしまうという力がつねに働いている。…しかしこれは多様性の否定にほかならず、ここに日本社会と日本人にとっての大きな課題の一つがある。

青柳正規「人類文明の黎明と暮れ方」

だけでわかり合えるメンバーだけで物事を進めていく事のリスクから逃れられる。最近流行りの付度が非常に効く社会というのは、放っておくと新しいことにチャレンジできない。あるいは悪い習慣、悪い風土を温存してしまう。そこに「えっ、なんでこうなっているんですか。」というニューカマーを迎えることがとても大事です。あるいは文化人類学の世界からは、突然変異のような形で多様な生き物がいることが、大きな社会の変化の時に、生き延びる種というのを保存できる最大の方法だということもいわれます。



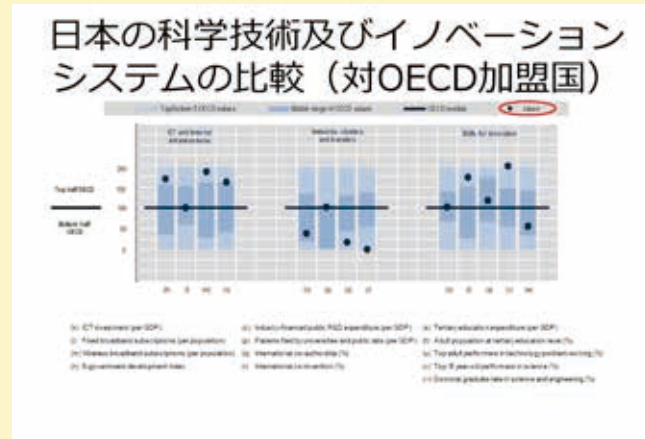
新しい人を自分の組織に取り入れるということはとても大事だと思います。「大事だとわかっていても」という声、私が企業でお話をしていると必ず聞こえてきます。女性活躍の4段階というのがこの表です。まずは採用していない。これが入り口です。採用しないことには育ちません。採用したら2段階目は育てる。そして次に、育った人が育児や介護で辞めない。続けるということが3つ目の段階になる。そして最後は昇進する。責任あるポジションに就く。よく言われるのは、女の人は責任あるポストに昇進する事を嫌がるということです。もちろん長時間労働になる、家庭責任との両立が難しいというのも大きな理由ですが、最近、高度経済学という分野で非常におもしろいことがわかってきました。一般的に女性は男性に比べて自己評価が厳しい。つまり、私はまだそこまで能力がついていませんという女性が大変多いということです。男性は「おっ、もういいとこまで俺は来ているんじゃないかな」と思える。同じ実力があっても女性は「私はまだまだ」という尻込みをするということがわかってきました。ではどうするか。いろんなところが実践をしていますが、丁寧にあなたは力がついているということを説明して、少し背中を押してやって責任あるポジションにつけ



現代社会における仏教の平等性とは

る。就いてしまうと女性は自信を持ち、またそういうポジションに就いたことがよかったと思うようになるということがわかってきています。これを是非、実践していただければ人口の半分である女性ももっといきいき働けると思います。

さて、これからまだ時代はどんどん変わっていくと思われます。この変わる時代の中で、私は男性にとっても女性にとっても大事なキーワードは、「学び続ける」こと。そして変化が速いわけですから、異なるものと繋がって化学変化を起こして「変化のスピードを上げていく」ことが大事だろうと思います。日本はこの20年～30年なぜ停滞していたかという分析をOECDがしています。日本の技術は優れている、日本の人材は優れているというのがOECDの評価です。唯一、日本の欠点はなにか。内弁慶じゃなくて外側の自分と違う人たち、違う組織と一緒に仕事をしてみることがとても下手。ここができれば日本はもっと良



い国になるというのがOECDの観点です。最後に私の好きな言葉を皆さんにお伝えして終わりたいと思います。「風土は“風”の人と“土”の人が創る」これは鹿児島言葉だそうです。風の人とは新しく来た人。土の人は元からその分野で努力をしている人。その両方が一緒になって次の新しい風土を創る。とても素敵な言葉かなと思います。



## 村木 厚子

津田塾大学 客員教授

- 1955年 高知県生まれ。土佐高校、高知大学卒業。
- 1978年 労働省(現厚生労働省)入省。女性政策、障がい者政策などに携わる。
- 2009年 郵便不正事件で有印公文書偽造等の罪に問われ、逮捕・起訴されるも、
- 2010年 無罪が確定、復職。
- 2013-15年 厚生労働事務次官。

退官後は津田塾大学客員教授を務めるほか、伊藤忠商事(株)社外取締役などを務める。また、累犯障害者を支援する共生社会を創る愛の基金や、生きづらさを抱える若年女性を支援する若草プロジェクトの活動に携わっている。



### 提言③

## 皆仏になる

岡田真水氏

実は私はこういう話題はどちらかというと苦手でございます、先ほどのお二人の先生方のお話を一所懸命に聞き入っていたところです。

今年（2020年）、龍谷大学に「ジェンダーと宗教研究センター」というものができました。岩田真美先生がセンター長をしていらっしゃいます。そのホームページに2015年9月国連サミットで、よりよい世界をめざす国際目標として、SDGs（持続可能な開発目標）が策定され、その中で地球上の誰一人取り残さないということが誓われているということが記されていました。この誰一人取り残さないという言葉は私が属しております、

日蓮宗のよりどころである法華経という經典の精神「皆仏になるんだ、なることができるんだ」というものに通じるものだと思います。仏になる可能性を誰一人排除しないということですね。もっとも、ものすごく時間のかかる人と早くできる人が出てくるわけですが、このSDGsの精神は、実は仏教と非常に馴染みやすいものであると感じております。もう一つのジェンダーですが、岩田先生の文章の中にジェンダー平等の実現は、貧困、教育、平和、不平等、全ての目標に関わってくる非常に重要な課題であるということが、そのページに記されています。ジェンダーの研究をしているところは様々ですが、ジェンダーを基軸とした宗教研究の拠点ができたとすることは、宗教界としても非常に大きな変化で素晴らしい活動だと思います、是非このセンターのことを知っていただきたくて冒頭でご紹介申しあげました。

私がジェンダーは苦手分野だと申しましたが、ある有名なジェンダーの研究者の先生に出会ったことで私の人生も随分変わり、ジェンダーの勉強を始めました。この真ん中の『女たちの如是我聞』という本は、毎年出る本ですが、これで色々勉強



強させていただきました。写真のやさしそうな女性は菅原征子先生とおっしゃって、昨年残念ながら病に倒れましたが、ジェンダーにとって大きなお仕事をされたと私は感じております。この左側の本は、先ほどの岩田真美先生に誘われて出ましたワークショップで出会った人々が集まってできた本です。これも宗教と女性の問題で、よく現場を示し書いた非常に貴重な本であるとして高い評価を得ている本です。これらを皆さんに是非読んでいただきたくて、ここにスライドにいたしました。

私の専門は一番右側のような本で、日頃、よりどころにしている典拠です。私の場合は社会調査をする力量もございませんし、文化人類学の人のようにフィールドワークをするというのも専門ではございません。漢訳仏典を読んだり、チベット語の文献を読んだり、これはパリー語の文献ですが、私がよりどころとしている材料、真実というのは經典の中にございます。このようなものの中から、私なりに仏教とジェンダーということをお話してみたいと考えております。私はおこがましくも、阪神・淡路大震災の後、環境宗教学というものを始めました。それから考えられる女性差別、その本質論を書いております。まず、女性男性だけではなく社会というのは、なくてはならないものを崇めて高い地位に置くのではなくて、なくてはならないものこそを被差別者として、ある階級に固定するというを長らくやってきたと考えられます。その人、その職業がなくなると本当に困るという大変な職業を被差別者として固定してしまうということです。例えば、世の中になくなくてはならない、皆様のお宅にあってはならない、何でしょう。それは人の死というものです。日本でこれを扱う人々には穴掘講があったり、また埋葬に携わる人々というのを特に固定しないで仲間内ですという習慣もありましたが、国によっては被差別階級ということになっています。このように、どうしても仕方のない仕事をしてくれる人を差別する。ですから女性のお仕事は本当に重要で、大変でやりたくないということを押し付ける。こういうことは起こってはいはずです。

次の言葉は、私が非常に尊敬しているジェンダー研究者である川橋範子先生が本に書いてらっしゃったものです。男性修行者にとって女性は修行における禁欲主義の理念を脅かす存在となり得る。美しい女性を見るとき、ふらふらと男性の方々の心が乱れるということから、女性を修行者から遠ざけようとするようなことが起こりました。そこで生まれたのが不浄観です。不浄観をよく読みますと、女性は鼻が出るとか、おしっこをすとかいろいろ書いてありますけど、男は出ないのかと。男も出ているのですが、特に女性の時にそういうことを言って女性は汚れていると言ったりします。修行者に関しては、やっぱり美しい女性を避けたい、自分の禁欲生活に触るところがあった。これは否めないものであろうと思われまます。

それからもう一つ、最後が一番環境宗教学らしいところですが、いままでに人類の歴史上、何度も人口爆発が起こる可能性がありました。不思議なことに人口爆発が起こりそうになり、人々を圧迫する人口圧が増大すると、疫病が起きたり、戦争が起きたり、環境の方が調節してきます。たくさん人が増えると困りますから、「生む性」というのはどうしても遠ざけられ、地位が低くなる。逆に、たくさん人が死ぬという時には、どんどん生んでもらわなくてはということで、女性の地位が向上する。こういうことが起きてきたというのは、環境史を見ると明らかです。ですから、いまも少子高齢化はなぜ起こっているのか。晩婚化とか、あるいは結婚をしないということは、戦後に起きた人口爆発を環境の方が抑えかけているということと連動しているとも言えます。しかしソフトランディングできずに、いきなり人口が激減してしまうと、国や社会が立



現代社会における仏教の平等性とは

ちいかなくなります。ですからどうかして子供の数を増やさないといけない、女性に生んでもらわなくてはいけない。そうすると、女性の地位を上げて生んでもらおうという動きが起こります。

さて、先ほどから引用している、川橋範子先生の『妻帯仏教の民族誌』という本がございます。美しい蓮の花が表紙になっております。その中に「さまざまな差別と抑圧の経験の中の差異に敏感な視点を意味する」とあります。今日の副題に「女性の視点から」とございますが、実はジェンダーの視点というのは、単なる女性男性の視点の違いを超えて、もっとたくさんの世の中に起こっている様々な差別と抑圧、そういう経験の中のほんの僅かな差異にも敏感になる視点のことだということをお書きでした。私はこれに非常に感銘を受けました。ジェンダー研究は何のためにあるのだろう。それは、それを入口に他人の苦しみのわかる人になるためであるということを川橋先生がおっしゃった。龍谷大学の桂先生がそれを聞かれて、初めて「ああ、ジェンダー研究ってそういうものなのか」と納得され、私もその話を又聞きした時に「ああそうなんだ、私も苦手だなんて言ってもらえない」と感じました。本日は、そういう視点で社会を見直すきっかけになればいいなと思っています。

私がジェンダー問題は苦手だと申ししたのは、実は私の生い立ちに理由がありまして、非常に恵まれていて今まで66年生きてきた間に一度も「女のくせに」と言われたことがないんです。両親がそもそもそういう育て方しない人で、お前はうちの跡継ぎだと常日頃言っており、「女のくせに」ということを絶対言わない人だったのみならず、学校時代も「女のくせに」と言われたことがありません。なぜかと考えますと私は大体、紅一点であることが多く、友達も男の子が多くて、男のような人間でありましたので、紅一点はすぐに白に染まるわけです。これは意外ですけど、自分は女の子だとあまり意識していないし、もう染まっているので、周りの男の子達もあまり私のことを女だと思っていなかったのかなと今になれば思います。この写真は大学の時ですけど、やっぱり紅一点なんです。隣におりるのが夫で師匠でもあります。あとは先生ばかりです。

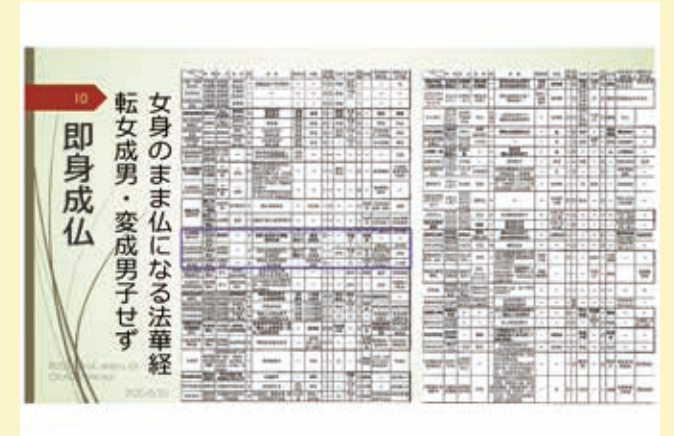
私がジェンダー問題は苦手だと申ししたのは、実は私の生い立ちに理由がありまして、非常に恵まれていて今まで66年生きてきた間に一度も「女のくせに」と言われたことがないんです。両親がそもそもそういう育て方しない人で、お前はうちの跡継ぎだと常日頃言っており、「女のくせに」ということを絶対言わない人だったのみならず、学校時代も「女のくせに」と言われたことがありません。なぜかと考えますと私は大体、紅一点であることが多く、友達も男の子が多くて、男のような人間でありましたので、紅一点はすぐに白に染まるわけです。これは意外ですけど、自分は女の子だとあまり意識していないし、もう染まっているので、周りの男の子達もあまり私のことを女だと思っていなかったのかなと今になれば思います。この写真は大学の時ですけど、やっぱり紅一点なんです。隣におりるのが夫で師匠でもあります。あとは先生ばかりです。



いつもこういう中で働いているうちに、いつの間にか自分も白の一人のような感じになっていました。「女の敵は女だ」と言いますが、ひょっとして私も女の敵だった時代があるのではないかと反省しきりです。

女だということを意識せずずっと生きてきましたが、なぜか21世紀になって突然、女であることに非常に不都合を感じるようになります。それは色々な委員会が3割は女でなければならない。突然そんなことになりまして、専門であろうがなかろうが、何でもお前やれとなりました。3割の呪いと書いてありますが、これに非常に苦しめられました。私の学部には教員が100名おりました中で女性の教授は4人しかいなくて、県立大学でしたから県の委員会とか審議会とか、そういうものが回ってきますと、私のみならず特定のところに集中するということになります。そうでなくてもたくさん仕事があるところに、3割の呪いが降り掛かって、なんて女って不都合なものだろうと初めて感じるようになりました。

そんな中で仲間に恵まれましてNPO活動なども色々やりましたが、東日本大震災の3年後に、私は「もうお坊さんになろう!」という気持ちになり60歳で早期退職して出家をいたしました。早期退職の頃と頭を剃った写真を見比べても、ほとんど変わってないかもしれません。日蓮宗では宗門の尼僧さん達ってみんなすごく元気なんです。宗会にいま2人の宗会議員がいて、割合としてはとても低いですが、かといって尼僧達が委縮しているかというところも感じられません。本来ならば私はここで仏教界にこのような差別が色々あって、尼僧達はこのような困っているんだという話をしなければならないのですが、私の直に接している人々の間ではそういうことはあまり起こっておりませんので、そのような話ができないことを本当に申し訳なく思います。というわけで先ほど紹介した、私がジェンダーの勉強をした本などを読んでいただけますとそういう事情がよくわかるのではないと思う次第です。うちの宗門でなぜ女性のお坊さんが元気かというと、法華経の中に身体が変わることなく、次の生に生まれ変わることもなく仏様になった。即身成仏した。その方が八歳で龍で、しかも女性として描かれているということがあると思います。まず幼いとい





現代社会における仏教の平等性とは

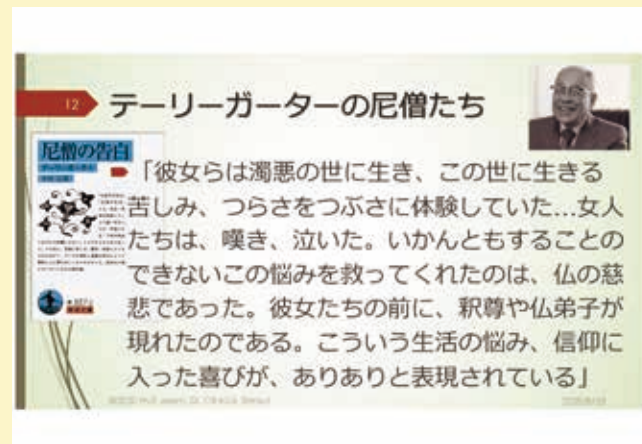
うこと、それから龍は天部の仲間と思っている人もいますが、仏教の分類では畜生です、動物です。しかも女性である。この八歳龍女たったひとりが膨大な經典の中でたった一人、その身のままで成仏した例として書かれています。実際に私も女人成仏を經典で勉強したことがあり、集めてみますとここだけがその身のままで仏様になった。法華經の3つの訳で、それ以外は全て男になったり、生まれ変わったりして仏になります。そういう經典をよりどころにしているということで女性に対する見方が違ったせいであろうと考えられます。

龍谷大学の岩田真美先生に呼ばれていったワークショップがこの画像ですが、そこで初めて尼僧さんが苦勞してらっしゃるお話を聞きました。例えば、尼僧さんは住職であっても自分のお寺の法要で導師ができなかったり、お葬式で導師ができなかったり、非常に徳の高い百歳の尼僧さんでも、戒を受けたばかりの男のお坊さんにもお辞儀をして下座にいないといけないというような8つのきまりがあります。何で大乘の我々が、このよう



な古いきまりを守らなければならないのか。そんなことが、まだ日本の仏教界に生きているのを聞いて、「そんなことが現在あるんですか」と大変驚くほど無知な人間でございました。というのも私が習った仏典には、このテーリガーターのようなものがあって、仏教のジェンダー平等というのは、お釈迦さまの言葉を読めば

自明なことです。仏教は階級の否定をした宗教なので、もちろん男女平等です。それがやはり当時の社会状況と少し合わない。釈尊はロックな人ですから、破壊的なことを言い出した。先ほどの村木先生のお話によると新しい人だったわけです。そんなものが入ってきた時の社会の人々の受け止め方は非常に混乱したものだだと思います。その中で、次第に先ほどのようなきまりが、後になって生まれたのは明らかです。大乘になりますと、



田中先生がおっしゃったような空観の立場から見れば、女や男っていう方がおかしくて、無差別平等のものである。これもまた自明なことです。しかし、中村元先生は本の中で、日本仏教でこのような男女平等というのは、例えば道元や日蓮や親鸞などによって説かれてきましたが、それはあくまでも覚りや宗教的な救済において平等であると言われたのであり、社会における不平等というものにはなかなかいってないのだという指摘をしていらっしゃいます。これからは、社会的な意味での万人の平等の推進を図っていかねばならない。仏教者の立場からいくと、先ほど申しましたように階級なんていうのはナンセンスであり、男女は平等である。これは大前提であります。これを実社会でどのように実現していくのか、ここが一番これから我々はしなければならないことだろうと思われま

こういう行事をやって女性の視点で云々、平等にいかねばならないという様なこと言っても、「結局何も変わらないんだよね」という声があがる。これは戸松理事長が話していたんですが、そういう人には是非この本を読んで欲しい。お綺麗ですよ、それでこのお嬢ちゃんのかわいいこと。私はこの写真が大好きなんですけど、村木先生の『あきらめない』とても勇気の出る本です。あきらめないだけでなく、極限状態で決して負けなかった先生の本です。私はこの本を読んで本当に震える思いがいたしました。仏教が、万人の平等を言わずして一体何がそれを言うのでしょうか。村木先生のように真実を言い続ける。勝とうと思わなくても負けない。真実を言い続ける。必ずいつか変わる。らいとうさんが言ってくれたように自分の中の太陽、真正の人を見つけようという努力をやめない。これを何があっても頑張っ



てくるものはあると思います。村木先生のお話に、女性が働きやすい職場にする取り組みを行った企業のTFPは上がるんだというお話がございました。一定の混乱があるけれど、それをどう越えたか、どんなマネジメントをしたか、それによってその企業の将来が変わるなら社会も同じことです。例えば女性をもっともっと働きやすくしてあげようというような新しい試み。それは大変なことかもしれませんが、それをした社会がやっぱりアフターコロナに力を持つであろう。これは疑う余地はないことだと思います。ということで、みんな仏になるんだ。そのための努力を私たちはどんなに大変でもあきらめないんだ。ということをお願いして私からの提言としたいと存じます。どうぞご清聴ありがとうございました。



## 岡田真水

日蓮宗僧侶  
兵庫県立大学 名誉教授

- 1954年 京都市生まれ  
東京大学文学部印度哲学印度文学専修課程卒業。  
同大学院修士。仏教文献学、仏教説話学、地域ネットワーク論
- 1976年 岡山妙興寺修徒岡田行弘と結婚
- 1982-85年 ドイツBonn大学(インド学)政府給費学生  
同大学Dr.Phil.(哲学博士)
- 1987年 長男出産
- 1991年 神戸女子大学文学部講師(ドイツ語・哲学)
- 1998年 兵庫県立大学環境人間学部教授(環境宗教学を創始)
- 2014年 退職 兵庫県立大学名誉教授。
- 2015年 日蓮宗教師。
- 2019年 同宗勸学院講学。
- 現在 日本学術会議第23-24期会員、日本宗教学会常務理事、  
公益財団法人全日本仏教会 社会・人権審議会委員 ほか



現代社会における仏教の平等性とは トークセッション

コーディネーター  
**戸松義晴**  
(公財)全日本仏教会理事長



**村木厚子**  
津田塾大学 客員教授



## トークセッション

**田中優子**  
法政大学総長



**岡田真水**  
日蓮宗僧侶  
兵庫県立大学 名誉教授



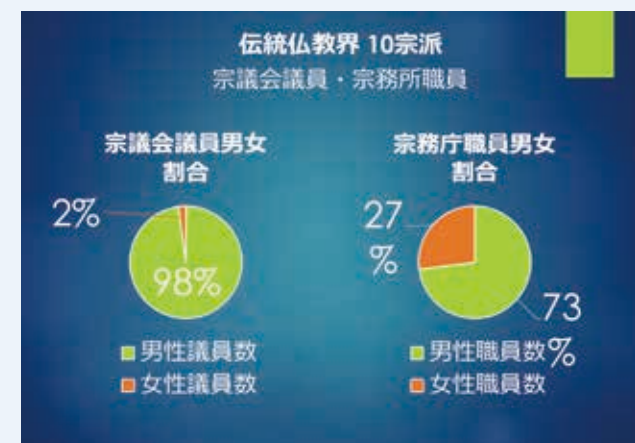
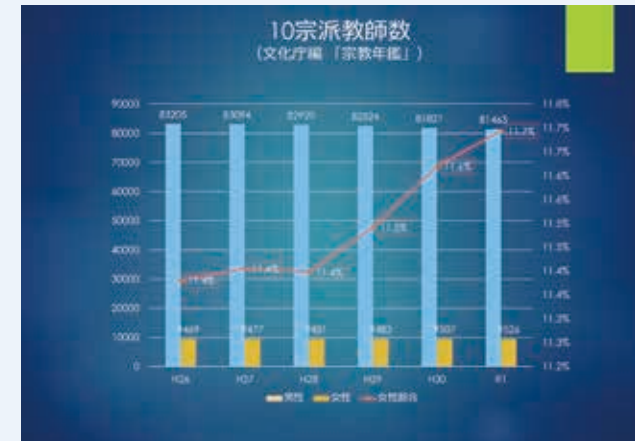
戸松

戸松でございます。ただいま、田中先生、村木先生、岡田先生からご発題を頂きました。冒頭で事務総長よりお話をさせていただきましたが、2018年に世界仏教徒連盟の世界大会を日本で開催し、東京宣言を採択いたしました。その中のひとつにジェンダー平等の具現化をあげております。岡田先生の発表にございましたように、仏教は寛りと救済という点で、男女だけでなく万人の平等を説いています。

では仏教界のあり方はどうなのかということを全日本仏教会の加盟団体にお伺いして調査いたしました。本来ならば全日本仏教会に加盟していただいている宗派・団体の皆様、それぞれにお伺いをして調査すべきですが通称10宗派という宗派がございまして、これが全国の寺院の約80%を占めておりますので、この



10宗派ということで調査をさせていただきました。まず教師、いわゆる僧侶の数を見ていくと、総数にあたるグラフ水色部分は平成26年から昨年度まで、83,000人から81,000人と人口減と同じようにだんだんと減ってきております。その中でグラフの黄色部分の女性教師数は増えております。宗派によって差はありますが、教師資格を取り住職になれる女性の数が増え、全体に占める女性教師の割合が増えていることがわかりま



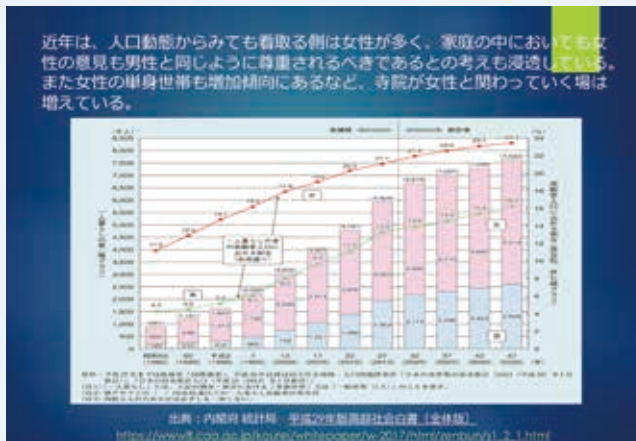
す。また、国には民意の代表として議員がいらっしゃいますように、実は、仏教界もそれぞれのお寺さん、あるいはお寺さんの先にある檀信門徒の皆さんの意見を反映し、様々な宗派の意思決定をするために宗議会有り、教師の投票によって選ばれた議員がおります。この宗議会の議員割合はどうかというと、ほぼ男性。98%は男性議員によっているということが決まっています。それから、それぞれのご宗派の宗務庁や宗務所、行政の役所ですが、こちらの職員も男性が約73%、女性が約27%で圧倒的に男性によってマネジメントが行われています。

また、私も全日本仏教会はどうかと申しますと、全日本仏教会の職員は先ほどの10宗派それぞれから1名ずつご推薦をいただいて成り立っておりますが、現在1名女性がおりますが、ほぼ男性でございます。それから、全日本仏教会には総務財政審議会、社会・人権審議会、国際交流審議会等、いくつかの審議会、委員会が設置されており、加盟団体から推薦いただいた委員と本会事務総長の推薦する学識経験者等の委員で構成されております。全日本仏教会は2年を1期としていますので、第29期(2010年)から2年ごとの変化ですが、女性委員の割合を見ますと、私が事務総長を初めて拝命いたしました2010年～2011年に8%、それから役員が交代し2012年～2013年に5%、2014年～2015年に7%、2016年～2017年に8%となって、再び私が事務総長になりました2018年～2019年の第33期には事務総長推薦委員を意図的に女性を多く推薦させていただき18%となりました。現在2020年～2021年の第34期も18%でございます。こういう中で諸先生の提言にもございましたように、全日本仏教会は女性・男性を超えて、仏教界でこういう活動をしたいという思いのある方達が機会平等に参加できる、特に意思決定の場面でご参加をいただくということがこれからの仏教界にとっては緊急に必要なことかなと感じており、本日のシンポジウムにいたりました。

また、社会全体で考えますと、スライドにあるように日本の人口動態は急激な人口減少に入ります。実は、世帯数はあまり減っておらず、単身(ひとり)世帯が増えています。単身世帯の男女割合を見てみると、グ



## 現代社会における仏教の平等性とは トークセッション



ラフの下の青色は男性で、上の赤色は女性です。2020年現在、約3分の2が女性です。平均寿命も女性と男性では差異がありますので、実際には女性が配偶者の男性をお見送りして、そしてその後の人生を過ごしていくことが多いということを物語っています。祭祀に関わることを決定する時に、もちろんご家族の意見などもあるとは思いますが、社会的にも配偶者である方の意見が非常に重要になります。同時にお寺に来られる方も

女性が年々増えていくわけで、そういう意味では、私達も女性の心に響くあり方をめざさないといけない。それには私も男性だけで決めているのでは、身をもってわからないので、女性の視点から意思決定できるあり方をめざしたい。そのようなことから本日のシンポジウムを開催させていただきました。

本日ご登壇いただきましたそれぞれの先生のお話が本当に素晴らしくて、これをさらにいかしていただけるようなお話をできればと思っております。

まず田中先生のお話の中で、寺院は元々アジール。キリスト教で言えばホスピスですね。それから仏教で言うとビハーラ。まさに避難所。体が悪くなったり、社会的に弱い立場であったり、他に行く場所がない方達を受け入れる場所であったというお話。そういう中で江戸時代には仏教は行政の組織として管理する側にまわり、近代になり廃仏毀釈があり、仏教が弱体化をしてシステム的になっていく。仏教の持っている平等思想が危険視された。実は仏教が社会を変えていく、あるいは政府を脅かすぐらいの力があるということを実感すべきだというお話をいただきました。そして仏教が女性解放運動の契機として思想の拠り所になっていた。平塚らいてうさんの色々な素晴らしい活動は、先生の資料から色々気づくところや勉強するところが多くありました。平塚らいてうさんが具体的な形にして活動された平等ということや人間としての拠り所を自分の中に見つけるということ、これはお釈迦さまが言われた、自らの心に火を灯せということと相通するかと思います。それを「わかった」という言葉で表現されておりました。この「わかった」というのが男性女性問わず、私達にとって大事なところだと感じました。この平塚らいてうさんの「わかった」というところが具体的な活動につながっていく、また女性は真正の人というところをもう少しお話しをしていただけるとありがたいと思います。よろしくお願いたします。

### 田中

おそらく機会があれば女性達は、そういう教を求めたと思うんです。相対的に他の人と自分を比較してどうかということではなく、自分自身の中で自分の力や能力を確認しながら自分を育てていく。のびのびと自分に自信を持っている。まさに自己肯定していく道を女性は本来求めています。にもかかわらず男性との比較の中に置かれてしまう。例えば、平塚らいてうの場合には、エリート階級でしたから本を読んで坐禅

につながりましたが、もっと仏教が広く庶民の階級の日常生活まで浸透していたら、ほかの女性達も早く気付いたのではないかなと思うんです。檀家制度があるから仏教は隔々まであるような気がしていますが、今は葬式仏教というように、そういう部分でしか生活に関わっていないんですね。私はこちらの機関誌の『全仏』を拝読していた時にオウム真理教の話が出てきて、オウム真理教の信者さんにどうして仏教にいなかったのですかと聞いたら、お寺は風景でしかなかったという言葉が出てきたという行を読みました。この感覚は多くの人が持っているんじゃないかなと思いました。例えばヨーロッパでは教会があって日曜日ごとに行く。行かない方も何かあれば教会に行きますし相談にも行きます。いつも開かれていて、ドアを開ければ入ってお祈りをすることができます。ところがお寺は入れないところがとても多いですね。何か特別な縁がない限り住職さんともなかなかお目にかかれなくて、遠いところになってしまって観光旅行する場所だったりするわけです。もっと日常的に接触し相談し、アジールということではなくても、困ったことがあったらお寺に行くという環境があれば、多くの人は平塚らいてうと同じような気持ちを持てたのではないかなと思うんです。私は女性解放というのは単に政治的なことではなくて、自分は人間としてどうありたいかということと関係すると思います。こうありたいと思った時に、本当はその上で社会の環境が働くことが大事になってくるんですが、仏教が最初のステップを作ることができると私は思っています。そういう意味で、もっとお寺を開いていただきたい。そう思っています。

### 戸松

ありがとうございます。確かに檀家・門徒中心になっているお寺が多いですから、顔を知っている方には非常に親しく接することができますが、知らない方がみえと、どちら様でしょうか、何でしょうみたいなことになりがちで、そういう意味でも日頃から積極的にどうぞお越しく下さいという姿勢をお示しして、住職のみならず、女性である奥様やお子さんが対応した方が話しやすい場合は、そのような対応を進んでできるような態勢をつくっていく。それから、私どもは人前でお話することは得意ですけど、困っている方をはじめ、人のお話を静かにちゃんと聞かなくてという訓練があまりされておられませんので、つい話している最中に、それはですねとか、仏教ではとかいうように話してしまうので、傾聴という言葉がありますけれども、聞くということをこれからも大事にしていきたいなと思ってお話を伺いました。ありがとうございました。



それでは村木先生。日本が現在、ジェンダーギャップ指数で121位。村木先生のお話の中で私が非常に強く印象を受けたのはスピードということでした。実は日本も良くなっている。ところが、その速度を超えて世界がもっと速く良くなっている。変化が速いんだということでした。ITや色々な技術によってさらに変化のスピードが速くなっていっている。そういう中で仏教というと、特に伝統を大事にして、後ろにはなかなかさがらないですけど前にもなかなか行かなくて、何か大きな変動がないと私達も変わらないという傾向



## 現代社会における仏教の平等性とは トークセッション

がございました。今回コロナウイルス感染症という問題が起きて、色々なかたちがいま変わりつつある。家族の形態が変わり、社会の構造も変わり、今までのような皆さんが集まって執り行う伝統的な葬儀なども変わってきています。そういう中でこのスピードという点で、日本社会では異質なものが入ってくると、うまくできない。これは、空気を読む、要するに忖度しているからではないかと私は思います。今まではいい点が多くありましたが、逆に空気を読まない。田中先生のお話になった平塚らいてうさんは当然空気を読んでないから、仏教の言葉から真実を感じて発言し活動をしたのだと思います。ある意味では、村木さんもおそらく省庁の中であまり空気を読まないで、正しいと思われることや国民の利益になることをやってこられたのかと思います。異質なものとうまくやることとスピードの点で、お気づきの点、あるいは仏教界に対して何かあれば、お話しをしていただければと思います。

### 村木

ありがとうございます。スピードという点では、今回のコロナで本当にみんな実感したと思うんですが、これまでは在宅勤務は難しいとか色々なことを言ってきたのですが、いざやらなきゃいけないって言ったら、あつという間にみんな在宅勤務できちゃったわけです。やってみたら大した不自由もなかったねという声



7割～8割です。いかに我々が「やらない」「できない」言い訳を重ねてきたかというのは非常に大きな気づきになったと思います。そういう意味では大きな危機に備えて、働き方改革や技術をもっと使うなど、我々は大事だと口では唱えていたようなことを前に進めなくてはいけないんだと、今回ものすごく学習できたかなという気がします。どの世界も一緒に、企業のビジネスの世界も宗教の世界でも同じことがきつとある。これを忘れずに生かすという気持ちを我々が持てるかどうかということだと思います。

また、空気を読むとか忖度という言葉の中で、併せて私が今とても気になっているのは同調圧力という言葉です。田中先生のお話の中にも出てきましたが、例えば女性が男性の真似をしたいわけではなくて、本当に自分の中に持っているものを大切に、それを発揮できる力が大事です。特に岡田先生の話の中で本当に面白かったですけど、環境が悪化して人口が減っているような時は、やっと女性の地位が上がるんだと。そういう意味ではチャンスなので、男だ女だという狭い発想でなくても一人ひとりそれぞれの力を発揮できる社会をつくるという感じになるといいかなと思います。30年以上前に「雇用機会均等法」ができて、最初に均等法をみんなに知ってもらおうとポスターを作ったんですが、実はその時の標語を考えたのは役所に入って1年目の女の子だったんです。その標語が「いま、個性は性を超える」だったんです。あれから30何年経ちますが、いまだにとっても本質的で、とっても新しい。やっぱり1年生に思い切ってその役をやらしてもらった、ニューカマーを大事にしたということでもあります。是非そのように一人ひとりを大事にできる社会をこれを契機につくっていただけたらいいかなと思います。

### 戸松

ありがとうございます。それでは岡田先生。実は先生が髪がふさふさの頃、最初にお会いしました。先生は研究されているだけではなく東日本大震災の後、宗教者災害支援連絡会の関係で何度もご遠方からお越しになられて、実際に色々活動もされて思いが形になっているという点や、スパッと頭を剃ってお坊さんになられていることも含めまして、行動力のある先生にお話をいただきたく今回ご登壇をお願いいたしました。先生のお話の中で仏教はロックだというお話で、ロックと聞いて私は仏教の言葉かなと思ったらロックンロールのロックですね。まさにロックンロールということは、ある意味で反社会的だったりします。田中先生のお話のにあった、仏教は社会のあり方に問わず平等を説く。そういう意味での危険性などのところに準ずるかと思いますが、仏教はロックンロールだということをもっと少し解説をしていただければと思います。

### 岡田

厳密に言うとロックンロールというのはちょっと狭い言い方で、やっぱりロックなんです。お釈迦さまはロッカーだと私は思いますね。これまでの古いものには全くこだわらない方で、さっき村木先生が「風の人」というのをおっしゃいましたが、釈尊は完全に風の人だったと思います。一か所に留まらないで、一つの村からだけ托鉢しない方でした。こだわりを捨てて、正しいと思うことを堂々とおっしゃり、堂々と実行されたのが我々の尊敬する仏様である。それで全てのロッカーがそうかというところでもないかもしれないですけど、20世紀を考えたやっぱりロッカーだったという気がするわけです。私が頭を剃っているのは伝統的なやり方に則ってというのではなくて、やっぱりロックな気分です。だってね、頭を剃っちゃったらスカートは履けませんよ。お化粧すると変だし。私が何か変わってみたいと思ったらこれ以上に自分が変わるという方法はなかったというか。

立ち上げの際には、戸松理事長に大変お世話になりました宗教者災害支援連絡会という活動も、お声掛けだけは私がさせていただきましたが、その後、多くの宗教者の方々がこれに参加してくださり、今もまだ活動をしてくださっています。第1回の会議をする時に戸松理事長のお寺でご相談したあの日のことを私は忘れません。いってみれば浄土宗と我々の宗派っていうのは必ずしも昔から幸せな関係ではなかったわけですが、さっきの「個性は性を超える」でありまして、私どもはそんなことにこだわっては何も変わらないと。先ほど紹介いたしました『女性達の如是我聞』の最新号は菅原征子先生の追悼号ですけど、私は不謹慎なことにちょっと笑ってしまった部分がありました。それは枝木さんとおっしゃる女性の方が、「高すぎるハードルは、私は越えないで下をくぐる」と書いていらっしゃったところで、こういうのがあっていい、これでいいじゃないという気が私はいたします。

お寺をもっと開いてくださいとおっしゃった田中先生の言葉、いかにできないと言ってやらなかったことがたくさんあったかとおっしゃってくださった村木先生の言葉を聞いておりますと、私達はもっと簡単にやれることをやりたくないの、やれないと言っていることがたくさんある。らいてう先生のお話の中にもそういうのを感じるところがあります。そこら辺をもうちょっとロックにやっちゃっていいんじゃないか。作曲法なんかにとらわれず、響くビートがあればいいじゃないか。そういう風に考えているわけでございます。

## 現代社会における仏教の平等性とは トークセッション

ちょっと破天荒でもうしわけありません。

### 戸松

ありがとうございました。今のお話を受けて、その響くところがというのは、誰に響くかということですよ。とかく男の人達が決めていくと、今までの既得権はある程度変えないで、何か大きい事案が起こると初めてそこで変わる。大きな被害が出るまで危ないと言ってもなかなか変わらない。これは多分日本の中で色々な形がそうだと思います。先生方のお話の中にもありましたように、私達一人ひとりの人間としての尊厳を認めるというのは、おそらく一番大事な仏教の根幹だと思います。その意味では、最終的には男性女性を超えるんですけど、例えば、仏教の中でも昔は同じ比丘尼があったのになくなっていった。そのテラワダと言うんでしょうか。私、その専門ではないんですが、タイなんか昔はありましたがなくなりました。それはお話にあったように、男性の修行者が性的な興味を持ち、規律が乱れる。それは男の生物としての弱さなんですけど、その生物学的弱さというのは果たして悪いことなのか。人間として自然なあり方としてどうなんだろうということもおそらくあると思うんですね。今の日本仏教のあり方というのは、私達は社会の皆さんとほぼ同じような生活を送って、家族を持っているというのが大多数のお寺ですし、多くのお寺はお子さんが跡を継ぐということが行われております。田中先生からはもっと門戸を開いてというお話がございました。あるいは、村木先生からスピードや多様性というお話をいただきました。女性の心に響く、一人ひとりの心に響くあり方をめざしていくにあって、こういうこと変えなくてはいけない、こんな事が足りないのではないかと思うところについてご提言をいただければありがたいと思いますので、田中先生から順番にお願いいたします。

### 田中

伝統という言葉はとても都合よく使われるんですね。つまり、やりたくない時によく使う言葉で、まるでそれがいいことのように言ってしまう。例えば、夫婦別姓という問題があります。夫婦別姓にすると家族が壊れるという言い方があるんですが、江戸時代は夫婦別姓です。「姓（せい）」というもの、「姓（かばね）」というものを持たない人と、持っている武士階級がみんな夫婦別姓なんです。ですから夫婦で同じ姓を持っている人は誰もいなかったんです。江戸時代に家族が成り立たなかったら、いま日本人はここにいませんよね。だからとてもおかしいことを言っているわけです。ご存じのように中国も韓国もいま夫婦別姓です。どうして日本は夫婦同姓になっているのかというと、ドイツを見習って明治初期にそうしたんです。しかし、いまドイツは選択制夫婦別姓です。例えばこういう一つひとつのことが、伝統だからという言葉で排除されている。一人ひとりが自分自身の内面を大事にするということであると、私は選択制でいいと思います。選択制夫婦別姓というのは、結婚した時にどっちにしようって二人で考えて選ぶわけです。とてもこれは大事なことだと思うんです。全てについて一人ひとりが自分で選んでいくということ。これは自立の基本だと思います。それをしないで選ぶのは面倒くさいということになると民主主義も成り立たない。そのようなことも私はいまの日本の女性の状況に大きな影響を与えているのではないかと思います。本当は自分の才能を大

事にしたいと思っている女性は、現実にそうできる社会や職場はとても大事で、やはりその基本は家の中だと思います。一人で生きていってもいいわけです。

それから男女と私達は言ってしまうけれど、LGBTという存在がみんなの中に浸透していった時に人間って男でも女でもない場合ってあるんだということに気がつくわけです。しかし実際は江戸時代ではLGBTなんて普通のことでした。そういう人はざらにいたので差別もありませんでした。ですからちょっと時代を変えてみれば、私達の価値観と違う時代があるんです。にもかかわらず全然違うことを伝統だと言うのはとても不思議なことで、歴史の事実を勉強しながらいま必要なのは何なのか、これから必要な社会ってどういう社会なのかということ私達は選んでいかなくてはならないと思います。

### 戸松

ありがとうございます。それでは村木先生お願いいたします。

### 村木

これからどうするかというところで、私はスピードを上げるためにどうすればいいのかをずっと役所にいた時も悩んでいて、今もやっぱり変わらず悩んでいるんですが、一つは「数」ってある程度大事だと思うんです。私が公務員になった時は、いわゆるキャリアの女性の比率が2%の時代です。今は官邸から号令が下っているせいもあって、どの省庁も30%以上の女性を採用します。数値目標の賛否は色々ありますが、外から客観的にコントロールできるものは数だということもある。目に見えるところでやっぱり女性がたくさん入ってこられるチャンスを作っていくっていうのは、とても大事なことだと思います。

それからもう一つは田中先生と同じで、歴史を扱った博物館などで勉強をしていると、我々がこれが日本の伝統だと思っているものが時代を遡れば全く違う。男女の役割分担も非常に固定的なものに見えるのが、時代を遡れば遡るほど多様で豊かになっていく。それを学ぶというのは非常に大事なことだと思います。いま思っていることが本当に正しいのかということも科学でも、それから歴史の勉強でも、色々な形で再検証をして少し前に進むために、何か目標設定をしていくというのが大事になってくるのかと思います。

### 戸松

ありがとうございます。岡田先生ロックなお話をお願いします。

### 岡田

田中先生と村木先生のお話には非常に共感するところが多いです。例えば伝統という言葉が非常に都合よく使われている。昔から昔からっていつからって聞いたら、たかが百年だったり。私京都生まれですが京都で百年の店を老舗なんて呼びませんよね、あそこ老舗やなっていえば大体三百年ぐらいですかね。また、時代が違えば価値観も違うし、人のあり方も全く違ったのに、そういうのを知らなくて都合よく伝統という言葉を使って変化を嫌うということ。確かにそうだと思います。私達も騙されないようにしないといけないですね。



## 現代社会における仏教の平等性とは トークセッション

さっき戸松理事長もおっしゃいましたけど、聞くことや待つことはすごく大事で、お寺を開きましょうということになった時に、どうかして人に来てもらおうと色々なイベントを考えて、告知して来てもらおうとするんです。それも非常に重要なことですが、コロナの中でそういうのを全部できなくなったということもあります。お寺に何とかして下さ



いとか、こういうことをお願いしますと言われた時に、だいたい私は「ちょっと無理です」と言っちゃうわけですね。例えば「客殿貸してください。」と言われて、本当は空いているのに「すみません、つまっているんです」という感じで。そうじゃなくて地域の人がお寺を貸してほしい、地域のイベントをしたいと言ってきた時に「はいっ」と言って貸してあげられるかどうか。いつもそれに応えたいとは思いますが、葬式仏教ってすごく悪く言われますけど、皆さんしてほしいんですね。皆さんがそうしてほしいと言ってこられるので、一緒に最期の時を迎えたりお送りしたりしていますけど、私のお寺に来る人が、もうそういうのいらんわと言って、してほしくなくなったらやめちゃったっていいんじゃないかと私は思うんですよ。そんなんで生きていけるのかと言われるんですけど、私達はもともと乞食者ですから境内の片隅を掘りくり返して何か作って食べていこうと私は思っています。お寺に求められていることは何なのかということをよくお聞きして、それを実現すべく頑張りたい。ただ自分でも難しいです。一生懸命勉強している時に電話が掛かってきて、家族の色々なくならないことを相談されると「お前の家で考える」とか思うんですが、そうじゃなくてそういう時こそが実は聞かなくてはいけない時で、そういう時こそが仏の言葉を伝えるチャンスでもあります。だからお寺を開けということとお寺は聞けというのは、ほとんど同じだと思います。村木先生もおっしゃいましたけど、そういう時に歴史を学ぶ大切さというのすごく感じます。学びたい人、教えてほしい人というの意外に多いんですね。毎日あげているお経の意味がさっぱり分からないので教えてほしいと言ってこられる方々もいる。特に女性が多いです。そんな時に「いやちょっと忙しいしね」とか言っちゃったら駄目だと思って「今度お寺の近所で市があって、そこで住職が辻説法しています。それを聞いて市の食べ物を買って家に来ませんか。ちょっと勉強してみましよう。」という感じで新しい講を始めました。これはものすごく楽しいです。このような試みを色々やってみたいと思っています。お寺はいつも衆生の声に耳を傾ける場所であってほしい。先ほど、アジールという言葉をお使いになりました。皆さんの抛り所で皆さんの声を聞いて、それを聞きわけてさしあげる。何もできないかもしれないけど、聞くだけでもすごく力がありますよね。だからそういう場所にしたいと私は考えております。戸松理事長の言葉はちょっと耳が痛かったですね。檀家の人だったら一生懸命聞いて、全然知らない人が来ていきなり何か言い出したら、あんたうちの檀家ですかとか聞いたりするわけですよ。それではいけないので、もっと心を開いて人々の声を聞くように頑張りたいと思っています。思っている割にひとりよく喋っていますね。すみません。

### 戸松

ありがとうございました。平塚らいてうさんのお話がありましたが、質問がきております。

平塚らいてうさんの強い思いは現代社会に生きていられると思われませんか。また現在の女性に足りないものは何だと思えますか。

田中先生、村木先生、岡田先生それぞれ何か感じるところがあればお答えいただければと思います。

### 田中

まず平塚らいてうが何を言っていたのかということがあまり知られていないかと思っています。女性活躍と言っているけれど日本の女性活躍の歴史ってあまり知られてなくて、平塚らいてうの基本になっているものの一つは古代の社会なんです。日本の古代社会というのは天照（あまてらす）に象徴されるように女性が引っ張っていた。それから母系制社会であったことははっきりしています。つまりお嫁に行くわけではない。むしろ自分の親と一緒に子供を育てていて男性は通ってくるという通い婚の時代がとて長かった。ですから財産は女性から女性に引き渡していた時代があるんです。そういうような歴史も踏まえて平塚らいてうは言っているので「太陽」という言葉が出てくる。まさにこれは伝統です。そういうように本来人間は、女性はどうやって生きてきたのだろうということをも日本の歴史からだけではなく、もう一度知ることすごく大事かなと思います。そうすると何で私達女性はこの時代はこんな風になっちゃっているんだろうということと比較してみることができると思うんです。強い思いを持つことは大事ですが、そういう知識を得るということも自信を持つひとつのとてもいいチャンスだと思います。

それから、らいてうの中にある強い思いというのは仏教で目覚めた自己肯定感なんです。ですから自分の能力を発揮するということは決してエゴイズムではなくて、私だけがそうしたいということではなく、人間誰でもそうすべきなのだ。そうする権利があるし、そうする方が社会が良くなるということに確信を持って言っています。そういう意味で個人というものが持っている力を信じる。私は、まだ現在の女性はそういう自己肯定感は足りないと思っています。いろんな機会にその自己肯定感を育ててほしい。例えばある地位へのお誘いがきた時に「いや私なんか」とおっしゃる方が多いですが、そうではなくて引き受けてしまって自分を育てるとか。それも自己肯定感への道なんです。そういうことを次々にやっていくと社会も変わるだろうと思っています。

### 戸松

ありがとうございます。では村木先生いかがですか。

### 村木

今、大学で学生を教えていて、特に女の子を見ていると自分の力を発揮したいという気持ちは強烈にあるし、ものすごく力を持っている子が多い。ただ何と云うか、いい子が多いので「親はどう思うだろう」「お友達はどう思うだろう」「世の中はどう思うだろう」という周りも凄く見ている子が多い気がするんですね。

## 現代社会における仏教の平等性とは トークセッション

やっぱりひとつ上の世代が、「あなた達の時代、あるいはあなたは、あなたのやりたいことを大切にしていんだよ。」というメッセージをちゃんと送ってあげなくてはいけないのかなと思います。それからもう一つは、そうやっている事例を一つでも二つでも見せる。別に運動としてとかではなくていい。本当に普通に楽しそうに自分らしく力を発揮している姿がちょっと上の世代に見えただけで、すごく学生達は元気になるので、それがすごく大事なことかと思えます。どこかの研究で、学校に数学の女の先生がいると女の子の数学の成績が良くなり、国語の男のいい先生がいると男の子の国語の成績が良くなるっていう調査研究があるんですけど、少しでも自分らしくいい形をちょっと先に行く大人が見せるというのも大事なかなと思います。

### 戸松

ありがとうございます。岡田先生お願いします。

### 岡田

お二人のお話で尽きていると思います。さっき田中先生が「何か新しいことを頼まれたら引き受けちゃいなさい」とおっしゃいましたが、これ村木先生の本にも書いてありました。確かにそれで伸びますよね。おっしゃるように今頃の若い方ってね、「今頃の若い方」っていう言い方嫌いなんですけど、でも一般的に本当に優しく、皆さんの意向をすごく気にされる方が多いですよね。そういう若い方に、いいロールモデルを示してあげると安心されるというのも本当にその通りだと思います。バチスタ手術で有名になられた須磨先生という心臓外科の先生がいらっしゃいますけど、その方が我々はいいいロールモデルを見せなきゃいけないっていうことをおっしゃっていました。須磨先生は確かに本当に素晴らしいロールモデルだったと思います。私ができるかどうかは別として、めざしたいとは思っております。こういうお坊さんがいろいろ出てきたら宗教界はどうなるのかなと思いつつながら、でもお坊さんになりたかったのになって、すごいロックなんだあんまりこんなところで話したくなかったのですが、戸松理事長に頼み込まれたので、仕方ないと引き受けたパネルですけど、とても元気を頂戴したような気がいたします。ジェンダー研究者の方々がこれを聞いて何とおっしゃるか大変心配ではありますが、戸松理事長うまくまとめてくださいね。

### 戸松

ありがとうございます。私も三人の先生のお話を聞いていて、自分の反省点としてやはり伝統という言葉について考えました。これは私個人や仏教界だけではなくて、おそらく全ての伝統的なところが「伝統なんかでございまして」という言葉を使っている。だけど今まで先生方のお話を伺って思ったのは、仏教は仏教なんです。仏教に新しいも古いも、それから間違っているも正しいもなく、仏教は仏教で、まさにお話の中にあつた一人ひとりのありのままの姿を認めるということだと思うんですよね。やはり仏教の強い点は世界のどこに行っても、そういう理念的なところは皆さんに非常に共感していただける。アメリカ等の伝統的なキリスト教の教団メインライン教会というところの中核メンバーがこの7年ぐらいでやめる方がどんどん増えてきていて、その方達はやめた後は無宗教、どこにも属さないことが多いです。アメリカは

色々なことを調査するのが大好きなので、何でも点数化します。ユダヤ教やキリスト教のプロテスタント、カトリックなど、それぞれ良い印象を持っている宗教に点数を付けるわけです。そうすると無宗教と無神論者や教会をやめてどこにも属さない人達が最高点を付けるのはみんな仏教なんですよ。おそらくそういう方達は、仏教を宗教とは思っていないんですね。やっぱり The way of life というか生き方として、今日のお話の根幹のところ共感していると私は感じています。ただ今のお寺は田中先生のご指摘のとおり、どちらかというと葬式などの儀式や儀礼をするところで、門戸も主に檀家の方のために開かれている。今日お話しただいた根幹に関わっていかないという現状があるのは、私は受け止めなくてはいけないかなと思っております。そういうところを私達が多くの方に感じていただく、そしてなおかつ生きる力や前を向いていく力になるような関わり方をしていくにはどうしたらいいだろうということを考えながらお話を伺いました。

現状で多くのお寺は家族間で継承していると思います。お嬢さましかいないお寺をはじめ、お寺の跡を継ぎたいという女性の方は必然的に増えてくると思っております。また、なりたくない人が跡取りに生まれて、なってしまうという弊害があるのも承知しております。また、小さい時から顔を知っている跡取りの僧侶に、後になってお檀家の方が回向してもらえるのは安心感と親しみやすさがある。その両方があると思えます。また、僧侶になるために例えば修行においてそれをめざす。そう思う女性の方をある程度、男性と同じような形で障害なく修行が受けられるかどうかなどということも、もう一度、私達が見直していかなければいけない。それはやはり男性だけではわからないことがあるので、女性の視点からもう一度見ていただくということが必要かなと感じました。

それから私ども全日本仏教会は「伝統仏教教団」という言葉をよく使いますが、「仏教教団」ということであって、歴史が長いとか短いとかいうことは、社会的には勿論意味があるかもしれませんが、そういうことはあまり仏教の本来の教えからするとあまり意味がないのかなと思いますので、私個人としてはこれからは使うのは止めようかなと感じました。私の立場でこういうことを言うとお叱りを受けるかもしれませんが、これは今日のお話を受ければ大事なところ。全日本仏教会は色々な宗派、教えの連合体で、どの教えが正しい間違っているということは一切無く、お互いにそれぞれの教えを尊重し合い協力して、皆様一人ひとりが安心して前を向いて生きていけるように仏陀の教えを社会的に具現化する。さらにそれが世界的な平和に繋がるということがこの会の目的でございます。全日本仏教会というのは実は非常に微力で、加盟団体の皆様にシンポジウムがあつてご提言いただき、おそらくこういうことを社会の皆さまは思われているということをお知らせして、是非できましたらそれぞれのご宗派で具現化をしていただきたいということをお願いするような立場でございます。今日いただいたお話を加盟団体の皆様にお知らせしていきたいと思っております。

実は今日のシンポジウムは、ほとんど打ち合わせはしておりませんで、出た時のまさに自然体でやりたいということで大変先生方にはご迷惑をおかけし、突然の質問、あるいは全然話が違うじゃないかという進行になっております。本来ならば視聴者の皆さんお一人おひとりの顔を見ながら、ご意見やご質問を伺ったりしたいと思っておりました。これまで私から先生方に質問させていただきましたが、ご登壇の先生方でお互いに何か聞いてみたいということがございましたら、意見でもコメントでも質問でもいいですがございますか。



## 現代社会における仏教の平等性とは トークセッション

### 田中

岡田さんに伺いたいですね。さっきの頭を剃ったってということで、すごく何か自由におなりになったんじゃないかなと思ったんです。というのは江戸時代に、僧形になったことで日々の生活がすごく自由になったってことを書いている文学者がいるんですね。江戸時代では僧形になる、つまり頭を剃るということはイコール僧侶になることではなくて、例えば引退して隠居する時にも頭を剃っちゃったりするんです。「社会の規範から私は外れますよ」という印なんです。ですから考えてみれば、そういうことってあってもいいかもしれないと思うのは、僧侶になるわけじゃないけど頭剃っちゃいますみたいな。それってすごく自由ですっていう、何かそういうようなあらわれ方をすると「仏教って自由への道なんだ」という考え方が生まれるんじゃないかなと思ったんです。そういう何かこう仏教のイメージを変えることって、いろいろとできそうな気がするんです。私はいま、お話を聞いていて「僧形」僧の形というのをとても興味を持ちました。だけでも宗派によっては頭を剃らない宗派もあります。



それからやっぱり宗派ということを感じてしまう。例えば私は道元の正法眼蔵なんてすごく好きで、あれはまさに Way of life なんですよ。つまりとにかく坐りなさいってわけです。坐禅さえすれば自分の中の真の自分はわかるんだって言いきっちゃうわけですよ。それで言葉なんかいらないうって言うふうに言いきってしまうんですよ。それも私は仏教の中ですごく大事なことだと思います。ただ、こういう色々な宗派がいるところで、そのことをあまり強調すると申し訳ないかなという配慮があったりするということもある。宗派って何だろうって思うところと、でもやっぱり仏教の究極の目的は自由なんじゃないかなって思うところと二つありました。岡田さん自由ってことでいいでしょうか。

### 岡田

まさに私はそういう気持ちでございました。境内を歩いていて髪の毛のない自分の影を見た時に「あ～自由だ」という気がいたしました。釈尊はとらわれというものを離れなさいとおっしゃいました。

宗派も、私にとって日蓮宗は何かって言うと日蓮という人が好きである。日蓮の書いたものがとっても好きである。そのように私も生きてみたいと思った。そういうものでございます。だからやっぱりこだわらないというのはすごく仏教の中では重要な教えであると思えました。でもみんなが自由にするためには私もいろいろ我慢しなければならないことがあるという、そこは非常に重要なところであると思えます。

### 戸松

いかがですか。村木先生、岡田先生なにか。

### 村木

いまのお話に関連して、私も自由になりたい。私が役人を辞めてから5年経ちますが、本当にちょっとずつしか自分が変わっていけない。やはりいろんなものを身に纏っていたことがわかってきて、それが少しずつ溶けていく5年間だったと思うんです。自分の力を思いきり発揮できるようにしたい、若い人達にもそういう社会を作りたいと思う一方で、自分が仕事とか日常にどっぷり浸かっているもの、職業とかいうもので何ていうかものすごく縛られる。知らない間に縛られる。それからさっきの「昔から」っていつから。「みんなが言ってる」みんなって誰。いろんなものに縛られている気がするんですね。それをこう何か解きほぐすために、ちょっと私はまだ髪をおろす勇気はないので、田中先生、岡田先生から何かこう少しでも自分を自由にできるきっかけになる、何か良い方法ってないでしょうか。

### 岡田

村木先生にそれ言われるとすごいなんか不思議な気がいたします。あの拘束の時間において村木先生の心の自由ってすごかったと思います。それをみんな得られなくて、嘘の調書にハンコを押したりしていたわけですから、村木先生こそが心の自由を最もよくご存知な方ではないかと思えます。

### 村木

そんな風に考えたことなかったです。すごい新鮮。

### 戸松

ちょっと私からよろしいですか。いまの村木先生のお話を自分自身に当てはめると、私も趣味とか、こういうことをやってみたいとか、正直申しあげて車も好きだからスーパーカーを「パーッ！」って運転してみたいとか思うことがあります。だけど僧侶としていかがなものか、やはりそういうところはふさわしくないと思う自分があるって、せいぜい雑誌を買って写真を見て満足するとか、そういうところもあるわけです。しがらみというか社会的なイメージというのがあって、そういう点で私もよく批判されるのは、何だか坊主にしているんだかしてないのか普通の髪の毛で中途半端ですと。頭剃るところまでいかず、まだまだそういう執着があるか何か自分でもよくわからないですが。

先ほど田中先生が宗派って一体なんだろうとおっしゃいました。私は、生まれた縁がたまたま浄土宗の寺でした。私が小さい時から祖父や父のやってきたことを見て自然に身についたように、それぞれのご宗派のスタイルや伝統とか流れがあって、それぞれの違いがあると思います。やはりそれぞれに強い信仰をもってやってこられた。それが最近、全日本仏教会の中でも積極的に様々な宗派にはたらきかけをして、いい形で宗派のしがらみを越えて色々な活動や情報共有をできてきている段階でございます。そういう意味では、今後一つの宗派でいろんなことをやっていくということにだんだん限界が出てくると思います。特に過疎地では、どこの宗派だからとか何の教えだからというよりも、その地域の知っているお寺の和尚さんにご回向してもらいたいと思われる方が多いように感じます。東日本大震災の時に、お寺さんも被災されて亡くなられ

## 現代社会における仏教の平等性とは トークセッション

た方もいたので、東京をはじめ都市部から若い僧侶達がボランティアでお経よみにいきました。しかし現地からちょっと待ってくれと声があがりました。要するに、言葉も違うし顔も知らない和尚さんにお経をよんでもらってもあまりありがたくないと。それよりも違う宗派だったって、違うお経だったって、普段から顔見知りの人によんでもらいたいというのが現場の声でした。ですから、そういうボランティアを派遣するのは一切止めて現場の方達におまかせしました。もちろん宗派や教えを大切にされているところもあると思いますが、おそらく地域にとってはお寺の宗派とか教えは最終的には皆さんあまり気にされず、仏教の教えとして一つ集約ができるのかなと思います。将来のあり方として過疎地などでは、宗派を超えたお寺のあり方も今後変わっていく。まさにロックという体でいくとそういうことも考えてもいいのかなと感じて、つい手を挙げました。

いかがでしょうか。ジェンダーのことだけでなく、何かお気づきの点や仏教界のここがよくわからないとか、ここは変えた方がいいなどありましたら何でも結構でございますので是非この機会に言っていただきたいと思います。

### 村木

一つ御礼を申しあげていいですか。私、若草プロジェクトというところで、お家になかなかいられないような若年女性の支援をしているんですが、シェルターがもうすでに満杯で、普段だったら一晩二晩は畳の部屋で雑魚寝してって言ってたくさん受け入れることができるんだけど、このコロナ禍で感染が怖くて受け入れられなくなって、その時にどこか一晩とか二晩とか、あるいは施設へ行けるまでの一週間とか泊めてくれるところないかと一生懸命ホテルを探している中で、実はお寺が門戸を開いて預かってくださったんです。さっきお寺の門が開いていないという話が出ましたが、そういうところがあったというのはすごく嬉しかったし、こんな言い方は失礼だけど地域にそういうところがあるんだという目で初めてお寺を見た。それまではこの宗派でとか、お葬式の時にお世話になるという目でしか見ていなかったのに、いつもここにある大きな大事な社会資源という目で初めてお寺を見た。さっき岡田先生から来てもらうとか場所を貸すという話がありましたけど、あれを続けていると場所を借りた人同士で繋がって行って、すごく立派なコミュニティができるというお話を聞いたことがあるので、そうやってお寺が色々な形で周りの人と繋がったらすごくありがたいなと思っています。これからは近くなくてもZoomで繋がれるという手段も今回発見したので、岡田先生のお説教聞きたいです。そうやって繋がれたらすごくおもしろいし、例えば私がやっている刑務所を出たりとか、若い女の子とかのサポート、助けを求める人は女性も男性も若い人もお年寄りもいる、逆に助けてくださるお寺の側にも、色々な人がいて聞いてくれる、色々な人がいて助けてくださるみたいな感じになると、余計にお寺という場所をお願いできることがあるかもと言えるかなと思うので是非お願いしたいと思います。ダイバーシティの推進もお願いをしたいと思いました。

### 戸松

かしこまりました。田中先生いかがですか。

### 田中

いえ、もう十分です。今の村木さんのお話、本当に素晴らしいお話で。私が聞いてほしいって申しあげたことが、現実にもう開かれている。ということはそれをどんどん伝えることで、もっと開いていただけるんじゃないかということにとっても希望が持てました。ありがとうございました。

### 戸松

ありがとうございます。全日本仏教会は、宗教法人ではなくて公益財団法人でございまして、いただいたお話や情報を集約して多くの方にお伝えする。それからまた仏教界内部の要望に応じていくことを強く押し進めていきたいと思っております。

このジェンダーの問題も、先ほど田中先生や村木先生あるいは岡田先生からもございましたけども、仏教の教えそのものが当初から平等性を説いている。それは社会のしがらみの中に屈しないで平等性をずっと説き続けるということで、覚りと救済の点では平等性がきちっとある。ところが、社会の構造、具体的な形にはそれがなかなかない。そこはやはり変えていかないとだめだというお話を承りました。そういう点では、やはり変えていくためにトライをしなければエラーも起きなくて、エラーが起きなければ次の成功にもいかないと思いますので、失敗するかもしれませんが、今日いただいたお話をもとに私達のできるころからチャレンジをしたいと思っております。

またお寺が開かれたというお話も伺いました。実は、東日本大震災の時には神社さんやキリスト教、新宗教などの他の宗教の皆さんも同じ気持ちで地域の方のために門戸を開いておりました。私は日本宗教連盟の理事長も務めておまして、今回のシンポジウムは日本宗教連盟の後援もいただいておりますので、日本宗教連盟の方にも今日いただいたお話をフィードバックさせていただいて、日本の宗教界が力を合わせて、実際に困っていたり社会的に苦しい中にいる方に寄り添い、一人ひとりの人間性や人格が尊重される社会のあり方をそれぞれの立場から模索できるような取り組みをしていきたいと思っております。ジェンダーの先生方からは、なまぬるいというご批判を受けるかもしれませんが、自分でもちょっと不安ですけども、なるべく今日の先生方のお話を無駄にしないように、SDGsの「誰一人のこさない」これは思いだけではなく、形にしなければ伝わらないということでございますので、何としてでもできるところから一つひとつ形にしていきたいと思っております。本日はありがとうございました。



## 「SDGsとジェンダー平等」へのコメント

第33期国際交流審議会では、SDGsの「誰一人として取り残さない」という理念を全日仏が具体化するための議論にかかわった立場から、今回のシンポジウムについてコメントしてみたい。ジェンダーの視点は、SDGsのあらゆる分野の目標の実現に必要であるにもかかわらず、審議会ではジェンダー平等に取り組んでいると明言した教団はほぼ皆無であった（啓発ポスターを掲示して、いわゆる「やってる感」を出すだけでは不十分であろう）。例えば、コロナ禍で人々に寄り添う宗教者の重要性が強調されるが、コロナ禍では、女性が多くを占めるケア従事者により大きいリスクがもたらされるように、パンデミックもジェンダーと無関係ではない。

戸松理事長が示したように、全日仏は以前より多くの女性を各種委員会に登用するようになってきたが、執行部が変わることで退行しないように制度化を希望したい。多様性を取り込むことで組織は変容し前進していくと、村木氏は強調した。もちろん、従来の教団内の男女の落差をそのままにして女性を労働力の活用のために取り込むのでは意味がなく、女性が意思決定の場に参画できるようにしていくための「マネジメント」が重要である。また、仏教系の大学で、女性研究者の数が増えて仏教とジェンダーの研究が推進されることが強く望まれる。その意味で、今春、龍谷大学に「ジェンダーと宗教研究センター（GRRC）」が創設されたことは快挙である。

岡田師が、仏教では男女は無差別平等であると説いていたが、そうであればなぜ現状ではそうになっていないのかが問いただされるべきである。残念ながら今回のシンポジウムでは、女性議員の数など数値化できる差別以外の、教団内の性差別的な具体例は挙げられなかったため、そのことについては岡田師と筆者も執筆している『現代日本の仏教と女性 文化の越境とジェンダー』（那須、本多、碧海編、法蔵館、2019年）を読んでいただきたい。

田中氏が述べたように、仏教は権力に対抗する力を持つ。日本仏教を日本の良き「伝統」の代表として無批判にほめそやすのではなく、ジェンダーの視点から再考してほしい。ジェンダーは自己の立ち位置を見つめなおし、他者の痛みに共感する手がかりとなりえる。さらに、寺を開放することが強調されるあまり、現場で担い手となる女性たちの意思がないがしろにされるのは不当に思える。寺院内の主従関係や性別役割を改善し、人間関係が平等に開かれた寺にすることが、まず求められる。

多様な登壇者を起用した画期的なシンポジウムであったことは間違いないが、アユスやシャンティなどの仏教系NGOの現場でジェンダー平等に向けた取り組みを行っている女性に加わってもよかったと思う。パネリストの女性たちの洞察が現状に変化をもたらす力になることを強く願う。ジェンダー平等の視点から再建された仏教を全日仏から発信し、性別にかかわらず一人一人の尊厳が尊重される社会に近づいてほしい。

付記 筆者の「宗門における男女共同参画の推進のために」は『全仏』525号（2007年1月）に掲載されているのでそちらも参照されたい。



## 川橋 範子

第33期国際交流審議会委員、曹洞宗寺族

プリンストン大学大学院卒。専門は宗教学、文化人類学。2020年より国際日本文化研究センター客員教授、南山宗文化研究所客員研究員、龍谷大学ジェンダーと宗教研究センター研究員。

主な著書・共編著に『妻帯仏教の民族誌 ジェンダー宗教学からのアプローチ』（人文書院、2012年）、『宗教とジェンダーのポリティクス フェミニスト人類学のまなざし』（昭和堂、2016年）。

## 第1回「仏教とSDGs」についてのコメント

全日本仏教会では仏教とSDGsを考えるシンポジウム「現代社会における仏教の平等性とは～女性の視点から考える～」が開催された。その様子はメディアにも大きく取り上げられ、仏教界にとどまらず社会からも注目を集めた。いま仏教界はSDGsの実現に取り組もうとしている。その一方で、同会の国際交流審議会委員を務めた川橋範子氏は「ジェンダー平等がSDGsの全分野の目標の実現に必要であるにもかかわらず、ジェンダー平等の施策の重要性を強調する声が教団から聞かれなかった」（『週刊仏教タイムス』2020年10月22日）と指摘されている。その意味でもジェンダーの視点を取り入れた今回の企画の意義は大きく、今後も継続が望まれる。

シンポジウムでは元厚生労働事務次官の村木厚子氏が、SDGsの17の目標のうち日本が最も遅れているのは「女性の問題」と指摘し、ジェンダーギャップ指数のランクが低く、その順位が下がり続けている日本の現状に警鐘を鳴らされた。一方、日本仏教界に目を向けると、その課題はさらに深刻である。全日本仏教会理事長の戸松義晴氏は、日本仏教の主要10宗派の宗議会議員における女性議員の割合は2%、教団の事務局における女性職員の割合も3割に満たないというデータを示し、仏教界のジェンダー不平等な現状を指摘された。私が所属する浄土真宗本願寺派のように女性議員の割合が0%という教団もあり、意思決定の場に女性の声が届かないという現実がある。他方、法政大学総長の田中優子氏は、近代日本の女性解放運動の基底には仏教の平等思想があったことを明らかにされた。また兵庫県立大学名誉教授の岡田真水氏は、お釈迦様の言葉からジェンダー平等は自明であり、その仏教が万人の平等を言わずして誰が言うのか、との提言も出された。仏教の平等思想には真に人間を解放する力があるとすれば、なぜ仏教界においてジェンダー平等は実現できていないのか。私たちは、その現状を問わなければならない。

このシンポジウムの中で岡田氏が、龍谷大学ジェンダーと宗教研究センターが創設されたことをご紹介してくださったが、当センターでも11月6日に創設記念シンポジウム「誰ひとりとしてとりのこさない～ジェンダーと宗教の視点から～」をオンラインにて開催した。その基調講演では京都女子大学長の竹安栄子氏が、センターへの提言として「宗門組織における女性参画推進」「女性人材の養成」「ジェンダー視点を導入し普及する活動」など男性中心の仏教界に対する改革を提案された。シンポジウムには500名近い参加者があり、現状に変革を望む多くの声が寄せられた。

教団内に「取り残されている」と感じている人たちがいる限り、社会に向けて仏教の平等性を説いても説得力はないだろう。自分が「当たり前」だと思っていたことは、マジョリティ側の視点であったかもしれない。ジェンダーの視点は、多様性を認め合う、他者の痛みに共感する…たくさんの気づきをもたらしてくれる。私たちは自身の足元をもう一度見つめ直す必要があるのではないだろうか。そして、多くの期待や注目が集まっている今こそ次なる行動が問われている。



### 岩田真美

龍谷大学ジェンダーと宗教研究センター長。  
龍谷大学文学部真宗学科准教授。  
浄土真宗本願寺派僧侶。

専門は近世から近代にかけての真宗思想、女性と仏教に関する研究。主な共編著に『カミとホトケの幕末維新一交錯する宗教世界一』（法蔵館、2018年）、『仏教婦人雑誌の創刊』（法蔵館、2019年）、『近代真宗「女性教化」資料集成』全10巻（三人社、2020～2022年）等がある。



## 第1回「仏教とSDGs」についてのコメント

このたびのシンポジウムでは、三名の先生方から大いに学ばせていただきました。印象に残ったお話の一つに、中村元先生の言葉があります。それは、仏教界において男女の平等が説かれたのは悟りや宗教的救済に於いてであり、社会的な平等については、まだこれから推進される場所である、という主旨のものでした。

この「社会的な男女平等の推進」を考えると、日本社会のジェンダーギャップ（性別の違いにより生じる格差）の状況を知ることが、その手がかりの一つとなりそうです。数字などの客観的な情報を頼りに見ますと、たとえば世界経済フォーラムが毎年発表している「グローバル・ジェンダー・ギャップ・レポート（世界男女格差レポート）」によれば、2019年12月時点における日本は、調査対象151カ国中121位と、過去最低の順位となっていました。G7中最下位、G20の中でもサウジアラビアやトルコに続いてワースト3位というこの情報から、世界の中でも大きく遅れをとっている現状が読み解けるのではないかと思います。その要因として、性別役割分業の意識がとりわけ強い文化の中で、政治や経済、教育、マスコミ、医療や司法など、暮らしの基盤を形成するあらゆる意思決定機関において女性の数が1～2割程度にとどまっている、ということがあるようです。男女の格差が大きいほど女性がマイノリティ化してしまい、機会や尊厳が侵されたり、貧困状況が生まれたりしてしまう現状があるように感じています。

とりわけ長い歴史を持つ伝統仏教界は、そうした社会の影響を大きく受けていると言えそうです。意思決定機関の一つである各宗派の宗議会議員における女性の割合は平均0.2割と、残念ながら社会から遅れをとっている現状が見えます。こうした、女性のことを男性が決めることになる構図の中で、お寺に暮らす女性の多くは構造的に抑圧された状況で生活せざるをえない現実もあるようです。今のままでは、人口の半数以上いる女性が関わる「男女の格差」が生み出す苦しみに、仏教界として寄り添うことは難しいのではないかと危惧します。

お寺の女性お一人お一人の声を丁寧に共有しながら、まずは足元を見つめる動きを、たとえば人権研修などさまざまな機会から広めることができれば、やがて、意思決定機関に女性が等しく入る土壌も耕されていくことを期待したいと思います。

シンポジウムの中で、田中先生より次のような主旨のご提言がありました。「お寺や、それを通して知る仏教に、日常的に触れることができるならば、男女は平等である、ということに人々は気づけるのではないのでしょうか。」深く共感するところであり、ぜひ仏教界から良き発信を、と願っています。

お寺に暮らすすべての女性がありのままに日常を過ごせる仏教界へ。人々を苦しみから解放する仏縁が、そこからさらに広がることを信じています。



## 松崎香織

東京都生まれ、ロンドン育ち。一般社団法人未来の住職塾・理事。(公財)全日本仏教会 WFB 日本センター運営委員会委員、(公財)全日本仏教会広報委員会委員。米国 Fish Family 財団 JWLI (Japanese Women's Leadership Initiative) フェロー。ファンドレイザー。銀行の役員秘書として経営企画に約10年携わったのち、イギリスにて非営利組織のマーケティングに従事。2014年より未来の住職塾ならびに塾生コミュニティ(現在約650名)の運営に携わる。大正大学地域構想研究所 BSR 推進センター発行の月刊誌「地域寺院」に「お寺の女性の今、そしてこれから」を連載。寺院の運営を担う女性たちと「次世代のお寺の女性を考える会」を開催。

全日本仏教会 公開シンポジウム

# 仏教とSDGs

現代社会における仏教の平等性とは～女性の視点から考える～

2020年 8月25日(火)開催

---

発行日 2021年(令和3)年8月11日

発行所 公益財団法人 全日本仏教会

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4

TEL:03-3437-9275

FAX:03-3437-3260

---





公益財団法人

全日本仏教会

WFB (世界仏教徒連盟) 日本センター